
僕と吸血鬼

メフィスト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕と吸血鬼

【Nコード】

N1311D

【作者名】

メフィスト

【あらすじ】

なんてことない普通の中学生の黒沢弘はある日行き倒れている少女に出会う。実はその子は吸血鬼だった！これは、僕と元気な吸血鬼が繰り広げる吸血あり鮮血あり流血ありの、ドタバタコメディである！

第一話 あの子は吸血鬼？

僕の名前は黒沢弘。

成績は全てオール3の普通の中学一年生だ。

体力もずば抜けていいわけじゃないし、彼女もない。

こんな何の掛け値なしの僕はいつも自分の人生はそこそこの収入の仕事をしてそこそこの女の子と結婚するんだろうなあと思っていた。でもあの出会いが僕のそんな想いを変えた。

――

――

――

――

「はあ……今回のテストも70点か。あんなに勉強したのに」

いつも通り自分の席でテストの点数があがらずため息をつく。

「まあ、た同じ点数だな弘。本当に勉強してんのか？」

いきなり痛い事を言うこの男は僕の小学生からの友、白河優だ。

「してるぞ！ 僕の勉強量舐めるなよ！」

「ふっ、おまえいつつもそればかりだな。進歩しろよ」

頑張っているつもりなのだが、なかなか点数は上がらないのは認める。だがそんなにはつきり言うのは薄情ってもんじゃないだろうか。

「うるさいな！ どうせお前はいい点数で、それを僕に言いたいんだろ？」

「正解） ほくら100点だよ」

優は弘の目の前で100点のテスト用紙をひらひらさせる。

まったく、優は結構ハンサムなのだがこの性格はどうかと僕は思う。

「弘！ テストどうだった？ 少しはあがった？」

元気な声で話しかけてくるのは活発な男勝りの性格の少女、石垣楓だ。

「いやそれが、さっぱりダメだね。あはは……」

苦笑いしながら告げると楓は僕の手からテストを奪い取る。

「おお！ また弘は70点！？ 私でも連続してこの点数はとれないよ」

…どうして僕の周りにはこう性格の悪い人しかいないんだろうか…
…謎だ。

「気分悪いから僕帰るよ！」

そう叫びながら僕は鞆に荷物を詰めてさっさと教室から出て行くつもり。

「弘もう帰んの？ まだテストは全部帰ってきてないぞ」

「いいよ！ どうせわかってるんだから！」

弘はぽかんとしている友人達を背に教室から抜け出した。

毎度思っのだが何故僕は常に70点しかとれないんだろう。

そのせいでいつも馬鹿にされている。ああ、僕の人生って……

弘はそんな事を考えながら、一人で公園のベンチに座っていた。

「はあ、なんかテストとか学校とかもう考えたくないな……」

弘がそんなことを呟いていると、ぽつりぽつりと雨が降ってきた。

「あ、雨だ。帰ろっかな……」

弘がベンチから立ち上がろうとすると隣にいつのまにかぼろキレをまとった少女が座っていた。一瞬弘は戸惑ったが、傘も持たずに何してるんだらうと思いい、弘は声をかける。

「ねえ君。そんな寒いカツコしていると風邪ひいちゃうよ？」

少女は声をかけられても何も言わずにフラフラとしている。

「大丈夫？……あ！」

少女がふらつと倒れこみそうになったので思わず弘は支える。

「お腹が空いた……」

どうやらお腹が空いているらしいから、このままにしておくのも可哀想なのでその子をおんぶする。

「大丈夫！？ 今何か食べさせてあげるからね！」

弘が少女があまりに弱っているので気をもたせるために言う。

「え！？ 本当にいいの？」

少女が今まで本当に弱っていたとは思えない声で叫ぶ。

う……なんか嫌な予感がなんとなくする。

「じゃあ、いただきまーす」

カプっ……ちゅーちゅー

「あれ？ なんかちゅーちゅー言ってるけど」

少女は聞こえているのかいないのか、何かを吸い続けている

「え？ あれ？ あのー……君？」

あれーなんか首筋が痛いような……気のせいだよな。

「ちゅーちゅー」

ああそうか！僕は血を吸われてるんだな。もう死ぬのか……華のない人生だったなあ。

「じゃなくって！！ 離れてよ君！！」

弘が叫ぶと少女は残念そうな顔をして離れる。

「えー？ もうダメなの？」

もちろんダメだ。この子は可愛い顔して怖い事言うなあ。

「ダメだよ！ あやうくこの歳で逝っちゃうところだったじゃないか！」

「あ！ そういえば君！」

ああ無視ですか、そうですか。

ちよつとへこんでいる弘を無視して少女は続ける。

「ちよつと私ココにきてから、寝床がないんだ。君の家に泊めてくれる？」

人の血を勝手に飲んだあげく次は家に泊めろっていつのかこの子は……血を飲む！？

「君！！！！ なんで僕の血のんだのっ！！？」

弘がそう言うのと少女は少しうつむいて口からダラダラ弘の血を流しながら言う。

「あ……それはちょっとワケありなんだ」

「ダメだよ！ 人をお花畑に追い込んだからにはそれ相応の理由を言ってくれないと」

弘は自分でも必死だなど思いながら少女に問いかける。

「まあ、助けてくれた恩もあるし……」

少女はコホンと咳をする。

「私の名前はエヴァーナ。職業は吸血鬼よ……！」

「え……ええええ~~~~~!!!!!!?????」

どうやら僕の人生は平和に終わってはくれないらしい

第二話 吸血鬼は卵好き？

「弘君、お腹空いた」

吸血鬼の声が後ろから聞こえてくる。

「静かにしてよ。それより君ちゃんにご飯とか食べれるの？」

吸血鬼はにこにこ笑いながらご飯 ご飯 と僕の質問を無視して急かしている。

「やれやれ……君卵料理食べれる？」

「卵大好きー！！」

この子卵好きなんだー。意外だ。

「じゃあ、今夜はオムライスでいい？」

「オムライス大好きー！！！！」

「卵は何個ぐらいいれるー？」

「はやくー！！！！」

元気な女の子だなあ。弘はそう思いながらオムライスを作りはじめようとするよ。

「あ、そういえば弘君」

吸血鬼はいつの間にか隣にいてこっちを上目遣いで見つめている。

「何？ オムライスはまだまだ出来ないよ」

弘がそう言うと吸血鬼は少し黙って、コホンと咳をして言う。

「もう一回飲んでいい？」

「君さ……僕をもう一度遠くに連れて行くって言うの？」

弘が恐る恐る言うと吸血鬼はにこっと笑い飛びついてくる。

「うわああ！ ダメダメダメ〜！！」

「飲ませて〜！！」

なんと無茶を言う子であろうか。貧血で僕を殺すつもりかっ！！

弘が必死に手で吸血鬼を抑えていると吸血鬼がぴたっと止まる。

「弘君。もしかしてあそこのあるのは……チョコレート？」

「うん。僕の好物なんだ〜」

そう言うと吸血鬼はチョコを震えながら見つめつつ後ずさる。

「君………？」

「ひ、ひゃあああ！！！！！！」

「え？ どうしたの？ チョコ美味しいよ」

弘がチョコを吸血鬼に近づけると吸血鬼はさらにもものすごい勢いで後ずさる。

「チョコ嫌いななの！！ アレルギーなのおお！！」

そんな吸血鬼の様子をみて弘はきらーんと目を輝かせる。

「そうだったのか……もし僕の血を飲もうとしたら、料理にチョコ混ぜちゃうよ？」

につこり笑いながら弘が言うと吸血鬼はビクビクしながらこくこく頷く。

「うん。いい子だね」

「でもでもー」

吸血鬼がダダをこねる。

「めっ！ ソファでいい子にしてください！」

「ふあゝい。わかりました」

弘が一喝すると吸血鬼はおとなしくなってそふぁにぼふつと座る。

「これで良しっ」と

弘は吸血鬼の弱点を見つけた喜びと血を吸われなかった安心感でにっこりと笑う。

「一時はどうなると思ったけど……これで安心して料理できる」

「できたよ〜」

「やった〜!!」

弘がオムライスを持ってきて机に置いた瞬間吸血鬼が飛びつく。

『いただきます〜す!』

「ごちそうさまでした〜!」

「速っ!〜!」

ものすごい速さである。本当にこの子はただの女の子なのか？

「君! ちょっと食べるの速すぎじゃ……」

「~~~~~!!」

「……って寝てるし!」

弘はもう眠ってる吸血鬼にむかっておもわずつつこむ。

「それにしても食べてすぐ寝るって、まるで牛……」こぶっ！

吸血鬼の手が伸びて弘の腹を殴る。

「起きてるなら言ってよ君……！」

「ぐ~~~~!!!!」

ああ寝相が悪いのか。まったく、寝ても元気なんだからなあ。

こんなところで寝てしまうと風邪を引きそうなのでおんぶして自分の部屋のベッドに連れて行く。

「く~~~~世話のかかる子だ」

階段を登りながら弘は呟く。

「よいしょっど」

弘は気持ちよさそうに寝る吸血鬼をベッドに下ろし布団をかける。

「おやすみ」

弘は幸せそうに眠る吸血鬼にむかって呟いた。

第三話 吸血鬼と権利書

日光がサンサンと僕の顔に降り注ぐ。気持ちのいい朝。

「よく寝たよ〜」

僕はそういいながら昨日のことを思い出してみる。

「いやあ、いきなり女の子に出会ってその子が吸血鬼だなんて、誰も信じてくれないよな」

僕はそう呟きながら自分の部屋へ行くが……吸血鬼がいない。

「あれ？ あの子どこにいったんだろう」

僕はそう呟きながらその場を立ち去ろうとすると、ベッドの下からオムライスー！という奇妙な寝言が聞こえてきた……無視無視

「ダメー！ チョコパフェは食べれないのー!!」

このままだと公害ものだ。そう思って僕はベッドの下から吸血鬼を引っ張り出す。

「ほら！ 君！ 朝だよ！」

僕は吸血鬼のことを揺さぶる……むにゃむにゃ言っているだけでゼンゼン起きそうにない。

ほっぺたをにゅーっとなつてみる……おお！結構柔らかい！感

触がよくて僕は何回もほつぺたをにゅーっとなる。

「起きろ〜起きろ〜」

段々楽しくなってきた。ぺちぺちとほつぺたを叩き続ける。ずっと叩き続ける……

~~~~~10分後~~~~~

「流石に……もう起きてもいいんじゃないの？」

ほつぺで遊びすぎて吸血鬼のほつぺは真っ赤になってしまったが、この子は起きてくれない……そうだ！食いしん坊さんだから食べ物のことで起きるかも！

「起きないと、君の分の朝ごはんぬきにしちゃうよー！！」

そう言った途端ピキーンと妙な効果音を立てて吸血鬼は飛び起きるが……

「ほつぺた痛あ〜いー！！」

そうとう痛いらしく吸血鬼は起きてからずっとほつぺたをさすっている。吸血鬼はキツと涙目になりながらこっちを睨む。

「い、ごめん！ つい楽しくってー！！」

うーん我ながら情けない言い訳だなあと思います。ハイ。

「うう……この痛みを抑えるにはここに用意した「居候権利書」にサインしてもらないと……」

「そんな権利書この世にねえー！！！！」

うん、あやすつもりが思わず突っ込んだね。よくあるよくある。

「酷い弘君！！ 人のほっぺをつねって赤くしてあまつさえ私のパジャマ姿を見たのに！！」

ほっぺたつねって赤くしたのはは確かに悪いけど……パジャマ姿見たのも罪！？

「でも権利書「仮」にサインはちょっとなー……」

僕がそういつと吸血鬼は泣きそうになりながら僕の前にやってくる。

「それじゃあ弘君は！ 私に路上で牛乳瓶を売って暮らせというの……」

「牛乳瓶じゃなくて普通はマッチでしょ……」

「どっちでも同じようなものはず……よ……」

今長い間があったね。

「やっぱりだめ……なの？」



吸血鬼はそう言いながら……泣いちゃってマス! どうしようどうしようどうしよう!!!?? 僕あんまりこんなことにならないから対処のしかたがわからない!

「じい……ごめん! 泣かす気はなな……なかつただけどー!」

思わずうれつが回らなくなってしまう。

「居候はさせてあげるから。泣かないで……ね?」

弘がなんとかそういうと吸血鬼は……。

「やったー!」

ものすごく喜んでマス。はい。

「ありがとう弘君! 君ならいいと言ってくれと信じていましたですますよ!」

うーん、最後のほうは何言っているか僕わからないな!。耳鼻科に行ったほうがイイのかな?

……いやちょっとまで! これってもしかして……

「サインは君がいいって言ったからもつ書いておいたよ! これからもよろしくね弘君!」

吸血鬼はにこつと笑つ。

「さ……詐欺だ~~~~~!!!!!!」

どうやら僕は吸血鬼に騙されてしまっていたらしい。

「ふっはっははあ！ ご飯とおみそ汁のためならなんだってやるわ!!!!!!」

部屋の中に吸血鬼の豪快な笑い声が響きわたる……。

「ふー……元気だなあ」

僕は小さな声で呟いた。

## 第四話 吸血鬼とお買い物

「弘君ー!!」

元気いっぱい僕を呼ぶ声がある。また吸血鬼はなんかしでかしたのかな……。心配だ。もちろん吸血鬼ではなく僕の家。

「お腹空いたー!」

またデスカ……。呆れながら僕はキッチンから居間に行くと、食い散らかしたお皿がそこらじゅうに転がっていた。

「うーん、怪獣がこの子は」

流星にこれは片付けるのが大変そうだな。

「おかわりじゃー! おかわりをもってくるんじゃー!」

相変わらずの元気で叫びまくってるのは、昨日から僕と一緒に住み始めた吸血鬼「?」だ。人の事考えてません。しかも食いしん坊さんです。

「もう卵焼き作れないよー。卵もう使い切っちゃったよ」

「そう……。なら買いに行こうー!」

それはまずい! ただでさえ女の子と話しているだけだからかわれる僕だから、優や楓に運悪くはちあわせしてしまったらたまったもんじゃない。ただでさえこんな小さな子を連れているだけ怪しま

れそつなのに!!!

「それはまずいよ君!」

「そつときまれば出発だ〜!」

ハイ聞いてませんね。このクセは直して欲しいもんだよ。

「そつだ君!!!」

「何〜?」

「吸血鬼なのに日光にあたって大丈夫なの?」

結構これは最初から気にしていたことだけど、チョコレートが嫌いなんだから何が起こるか分からない。

「大丈夫! 買い物のお帰りに一緒にひなたぼっこでもしようよ!」

余計な心配だったね。大好物はにんにくとかいいだすんじゃないかな。ろっかこの子は。

「まあ待つてよ。ちょっとお金用意するから」

「は〜い!」

僕はそんなやりとりをしながら自分の部屋の机の中に隠してある生活費を取りに行く。

「君! くれぐれも周りの物には触らないでね!」

「は〜い！」

すごく心配だからはやくお金とって来よう。もちろん吸血鬼じゃなくて僕の家。

僕はそんなことを考えながらお金を机の中から取り出し、吸血鬼のいる居間へできるだけ急いでいく。あれ？居間に来たはいいが、肝心の吸血鬼がいない。なあんか嫌な予感がする……そう思った途端ドサツと背中になんかが乗る音がした。……まさか。

「いつただきま〜す！！！」

僕が止めるまもなく吸血鬼は僕の首筋に歯を立ててちゅーちゅーと嬉しそうに血を吸い始める。しかも逃げられないようにちゅっかりと腕を首に回している。だが伊達に吸血鬼を観察していたわけではない。

「ねえ、もしこのまま僕の血吸うんだったら今日買い物に行かないよっ。」

僕が辛うじてそう言つとちょっとだけ吸う勢いが弱くなった気がする。でもまだ意識がとびそうだ。

「お昼ごはんはんにチョコレートませちゃおっかなあ」

チョコレートという単語が決めてだったらしく吸血鬼は僕を解放してくれた。

「もう少し吸っちゃだめ？」

「ダメっ！！ ちゃんと言うこと聞かないと、買い物にいきませんよ！」

「はい」

吸血鬼は少しダダをこねたがそれを一蹴して僕は先に玄関へ行き家を出る。

「まって弘君~~~~」

吸血鬼がそう言いながら後ろからやってくる。僕の隣についてえへへっとおいついたからなのか誇らしげに笑う。ちよっただけこの子の面倒見てあげてもいいかな〜という気がした。・・・いけないいけない！洗脳されかけてたよ僕。

「どうしたの？ 弘君？」

吸血鬼が僕の顔を覗き込む。僕はなんでもないよと言ってそのままの速度で歩き出す。

-----  
-----  
-----

「やや！ この卵なんかお買い得なんじゃないの弘君!？」

「いや、その卵はダメだよ。値段が安いだけで品質がダメなんだ」

「卵にも品質とかあるの!？」

「あるんだよ〜卵にはね・・・」

僕は今スーパーの卵売り場でどの卵を買うかで迷っていた。はたからみれば卵について語っている変人達に見えてしまいかもしれないが、ここは生活がかかっているのだからしかたがない。

「この赤卵に私は決めました!!」

「だめだよ! それ高いんだよ!」

高級な卵をいれようとする吸血鬼を何とかなだめて、隠れたところにあつたお買い得卵を僕はカートに5パックほど放り込む。

「もうちょっと買って〜お願い」

「これ以上たべるとコレステロールがたまつて太っちゃうよ」

「それはだめ〜!! 私は大嫌い!!!」

そんなことを叫びながらも吸血鬼はさりげなく卵を入れる。

「何いれとんじゃ〜!!!!」

「ひいっ! ごめんなさい!!」

吸血鬼は僕の声が予想以上に大きかったからびっくりして縮こまる。ちよつと言い過ぎたかな・・・。

「大声出してごめん。でもそんなに卵は食べちゃダメだよ」

「は〜い！」

僕がいつもの調子になったからなのか吸血鬼はいつきに元気を取り戻す。立ち直るの早いなあ。

「じゃあ弘君！ さっそくレジへ直行だー！！」

「はいはい」

なんか慣れたな。このテンションに。

「敵はレジ打ち場にあり！！」

前言撤回。永遠に僕はこのテンション慣れることはできません。

そんなことを考えながら買い物を通し、スーパーから出ようとする。……。

「おお！ 奇遇だね弘！」

楓さん買い物中でしたか……。なんて運が悪いんだ僕は！ このタイミングで吸血鬼と一緒に住んでいるということを知られたら本当にやばいことになる。永遠に話のタネにされかねない！ 楓はそんな女だ。

「弘君！ 待つてよ〜！！」

見計らったかのように吸血鬼が僕のところに来てくる。



「え!?!? この子……誰?」

楓は僕と知らない女の子と一緒にいたのにかなり驚いたらしく目を丸くさせて聞く。

「いや、この子はね……」

「私は弘君の家に昨日から居候させてもらうことになった吸血鬼よ!?!」

……次回へ続きます!

## 第五話 吸血鬼とひなたぼっこ

「私は騙されない！ 貴方は吸血鬼ではなくヴァンパイアね！！？」

「いえ違いますわ！ 生クリーム好きなのがヴァンパイアで卵好きなのが吸血鬼よ！！」

「私は騙されない！ 貴方は吸血鬼と思わせておきながら死神ね！！？」

「いえ違いますわよ！ ダメージマント（ぼろぼろのマント）を着ているのが吸血鬼で清潔ローブを着ているのが死神よ！！」

吸血鬼が自分のことをカミングアウトした瞬間に楓が壊れちゃってこんな意味不明なやりとりを2人はスーパード真ん中で始めています。

「なら貴方が吸血鬼だという証拠を見せて！！」

「ふ……いいでしょう！ とくにご覧あれ！！」

2人は僕の疑問そっちのけで叫んでいる。……あれ？なんか首筋が痛い。ってこのパターンは！！？

「ほれれほう（これでどう）？」

吸血鬼が自慢げに僕の首筋に噛み付き楓に勝ち誇ったかのように言う。いや言うのはいいけど、噛むのはやめて……！

「何言っているかわからないけど、吸血鬼だということにはわかった！だからその平均普通70点男を放してあげて！！」

今さらりと酷い言葉をあびせられた気がするけど気のせいだよね！？

「貴方が負けを認めるなら放してしんぜよう」

「いやそんなこと言ってないで速く放してよ！ちよつと意識が飛びそうだよ！」

「さあ、負けを認めるのか認めないのか選びなさい！」

いやこんな場面で無視されるとは思わなかったね……なん  
か僕一話に一回は必ず吸血と無視されてない！？気のせい？

「認めるわ。貴方は立派な吸血鬼よ！」

「うむ、わかればよろしい」

そう言いながら吸血鬼は僕から離れる。

「君！また僕のこと吸血したね！」

「証拠を見せるため、仕方がなかったんだよ」

吸血鬼はいけしゃあしゃあと言い放つ。

その態度が少しカチンときたので僕は吸血鬼にこつんと強めにでこぴんをする。

「痛あああい！」

吸血鬼はそう言いながらおでこをさすっているが無視する。

「楓。この事は優に黙ってくれない？」

「なんで無視するの弘君!!」

「いやあ、私がそんなこと言うわけ……………ないよ  
！」

「今すっごく間があいたぞ」

絶対こいつは吸血鬼のこと優に言う気だ!!!!

「ごめん弘君。吸血もうしないから」

「わかった。もう吸血はするなよ!？」

「……………うん？」

「なんで間があいてさらに疑問符なんだ!？」

こいつも絶対今度吸血する気だ!!!!

「あ! あそこに優がつ!!」

楓がいきなり叫ぶ。

「えっ!？」

「嘘です」

この野郎

「あ! 弘君! 速く外にいかないとひなたぼっこできないよ!」

僕が楓を怒鳴りつけようと思った瞬間に吸血鬼が僕の服を思いつきりひっぱる。しめたとばかりに楓は走り出す。

「バイバイ吸血鬼ちゃん……あと平均普通70点男」

楓は捨て台詞を吐き走りながら吸血鬼にむかって手を振る。

「………殺す!!」

いきりたつ僕の服を引っ張りながら吸血鬼は楓に手を振り返す。

「じゃあね楓さん!!」

楓は聞こえたのか聞こえないのか、こちら(というか吸血鬼)に向かつて笑いかけ去って行った。

「それにしても楓は君が吸血鬼って聞いても全然平気そうだったなあ」

「ふ! 私の周りの空気は人を和ます効果があるのよ!」

誇らしげに吸血鬼は叫ぶ。

「はいはい」

「リアクション薄いよ弘君!!」

「早く公園に行つてひなたぼっこするよ」

「は〜い!!!」

なんか吸血鬼のあつかいかたがわかつたきがする。僕はそんな事を思いながら吸血鬼を連れて近くの公園に行く。公園といつても小さな砂場とブランコしかない小さな公園だ。

「おお!? この公園は・・・かつて私と天狗が争つた公園ね!?!」

「君と天狗が争つたかはわからないけど公園だよ」

僕がそう言つと吸血鬼は砂場にどさつと大の字に倒れこむ。

「い〜気持ちだ〜。弘君もおいで〜!」

吸血鬼は幸せそうな顔をして僕を手でちょいちょいと招き寄せよつとする。

「じゃあ・・・お言葉に甘えちゃおうかな」

周りに人がいないので自分も吸血鬼の横に倒れこむ。

「はぁあ〜この日光、たまりませんな〜」

「本当だね」

僕は相槌をうちながらたっぴりとひなたぼっこを満喫する。吸血鬼のほづをみると今にもとろけそうなほど幸せそうな顔をしている。

「弘君」

吸血鬼が僕に呼びかける。

「何？」

「また……いっしょにここでひなたぼっこしようね!!」

そう言った時の吸血鬼の笑顔は今までみた笑顔の中で一番輝いて見えた。

「うん。また来よう!!」

吸血鬼の幸せそうな笑顔を見た後では、僕はそういわずにはいられなかった。

## 第六話 吸血鬼のお友達

「いやあ、またひなたぼっこしたかったのに、これだと行けないね弘君」

吸血鬼はザーザーと派手な音をたてて降り続ける雨を見ながら僕に話しかける。

「そうだね……仕方がないから今日は家で遊びなさい」

「外に出てどしゃぶりワルツごっこやっちゃだめなのー!?!」

それはなんなんだ!?! そう思ったけど聞かないほうが幸せな時もあるのであえて放っておく。

「だめです! 外に出たら風邪引いちゃうでしょっ!」

「ふあゝい。わかりました」

吸血鬼は返事をするにたるそうな声をだして床に落ちている僕のDVDを漁りだす。

「ちよっ! 勝手にいじっちゃダメだよ! それよりそれがなんなのか知ってるの!?!」

「しってるよ! デーブイデーでしょ? これでおもしろいトトロが見れるって死神から聞いたよ!」

「何故トトロ限定!?!?!」



「なんか死神はディズニーが好きだかららしいよ」

死神とやら・・・トトロはディズニーではなくジブリです。

「弘君・・・これトトロ？」

「風の谷のナウシカ」って書いてあるけど」

「じゃあこれはトトロじゃないの!？」

はぁ・・・トトロしかこの子は目がないのか。そんなことを思っているときピンポンとチャイムがなる音がする。

「あ! はーい!」

僕は反射的に走り出しドアを開けると・・・。

「はじめまして弘さん。私は天狗と言うものです」

そこには・・・天狗がいた。

なんととっても声は女の子だけどどしゃぶりの雨の中に立っているのはまぎれもなく絵本とかでしかみたことがない<天狗>だからだ。それにしてもなんで僕の名前知っているんだ!？」

「あ、こちらこそ始めまして。こんなところになんの用ですか？」

僕普通に天狗と話してるよ・・・吸血鬼とあったおかげで少し驚きに免疫がついたのかな?・・・それよりこの天狗小さいな!。吸血鬼と同じくらいだ。

「ここにエヴァンナって人が来ませんでしたか？」

エヴァンナ？聞いたことあるような。

「弘君！誰が来たのー？」

吸血鬼がぱたぱたと廊下を駆けてくる。

「んとねえ、今天狗みたいな……うわっ！」

弘が言い終わらない内に天狗は凄いスピードで下駄を脱いで家に  
あがり吸血鬼を押し倒そうとする。

「エヴァ〜！！ 見つけたわよ〜！」

「天っ！？ 何故こんなところに！！！」

吸血鬼はそう叫びつつもひらりと天狗の攻撃を回避する。

「そりゃあ、仕事をさぼってるエヴァの様子を見て来いって天使と  
悪魔さんに言われたのよ！」

「なぬっ！ もうここにきたのがバレてしまったの！？」

吸血鬼はそう叫んだ後、天狗に襲い掛かろうとする。

「さからう気なのこのつるぺた！！！！」

「人が気にしていることを言うかこの未発達幼女っ！！！！」

2人は本気で怒ったらしくダツツと地面を蹴り戦闘を開始しようとするが……。

「2人ともやめなさい!!!」

2人はビタツと止まり、僕のほうを見る。これ以上暴れられたら家が絶対もたない。

「まず落ち着いて話し合おうよ2人とも」

僕がそう言うのと天狗ははっと我に返ったようで、ぺこつと僕にお辞儀する。

「あ、いきなり弘さんの家で暴れてしまいそうになってしまいました！  
ませんでした!」

「いや、いいよいいよ。それより外で雨に濡れちゃったでしょ？  
シャワー浴びてきてもいいよ」

「あ……ありがとうございます弘さん」

天狗はぺこつとお辞儀をしてぱたぱたとお風呂場へ行った。なんか吸血鬼と違って礼儀正しい子だな。

「そついえば君。なんでお仕事サボっていたの？ お仕事はちゃんとやらなきゃいけないよ」

僕がそう言うのと吸血鬼は少しべそをかきながら言う。

「だって、仕事内容は居候の主人の血1リットルだよ。弘君の血

そんなに吸っちゃったら弘君貧血で倒れちゃうよ!」

う・・・それが仕事内容か。できるだけ励まないで欲しいかな・・・でも仕事はちゃんとしなきゃって言った矢先そんなことは言えないな。

「じゃあ・・・毎日少しずつとっていく方針で・・・」

「おお!　じゃあ毎日200ミリリットルで五日で仕事終了はどう!?!」

「そんなハイペースだと僕死ぬよ!!」

僕が吸血鬼と言いついてると気持ちよさそうな顔をした女の子が現れた。

「弘さん。シャワーごちそうさまでした。すつごく気持ちよかったです」

・・・袴を着ているから天狗ちゃんか!それにしても、本当に礼儀正しい子だなあ。

「いいよいいよ。服はそれでいいの?　なんならお姉ちゃんが昔使っていた服貸すけど・・・」

「いえいえ!　私なんかになんかに気をつかわなくてもいいです。はい」

「それより天!　天使と悪魔さんなんて言ってた?　特に天使さん!」

吸血鬼が聞くと天狗は少しむっとした表情をつくる。

「なんか、『エヴァ？ できるだけ早めに集めないと……ア  
レだよアレ』だって」

「あと何日とか詳しく言っただけでなかった？」

「ああ、悪魔さんは『何日かかってもいいよ』って言ってたけど  
天使さんは『一週間以内に集めないと直々に私が行くわ』って言っ  
てたよ」

天狗がそうだった瞬間吸血鬼はがたがた震えだす。そんなに天使  
さんって怖いのかな？

「弘君！ もう一刻を争うから吸わせてー！！！」

吸血鬼はそう叫びながら僕に飛びついてくる。そうなんでも同じ  
手はくわないよ！

「君ー！ もし僕の血吸うのだったら板チョコを料理に混ぜちゃう  
よー！」

僕がそう言うのと吸血鬼はあうつとたじろぐが……。

「天使さんがくるよりはましだよー！」

相当必死らしい……。ここは可哀想だから少しだけ吸わせてあ  
げようかな？僕はそう思い吸血防止用のマフラーを脱ぐ。

「だめです弘さん！ エヴァは今かなり混乱してるから1リットル

「一気に吸っちゃいますよー!!」

「何!!!? それ速く言つてよー!!!」

「一気に吸い尽くさせてもらつよ弘君!」

ああ、今度は本当に危ないな・・・僕がそう思っていると天狗が吸血鬼の前に立ちはだかる。

「させないわ! 弘さんは私が守る!」

ありがとう天狗ちゃん・・・そう心の中で唱えながら僕はキッチンヘダツシユする。速く板チヨコを持ってこなければ!!

「天!!! そこをどきなさい!」

「だめよつ! あんたはここで止める!」

居間からそんなやりとりが聞こえる。あとで天狗ちゃんにお礼言わなきゃ!!そんなことを思いながらキッチンの中を漁ると・・・あつた!板チヨコだつ!

「天狗ちゃん! パス!」

僕は板チヨコを投げると、天狗ちゃんはぱしつとそれをとって吸血鬼の口に押し込む。すると、吸血鬼はすごい悲鳴をあげながら倒れてしまった。

「ふ~~~~・・・なんとか一件落着だね!」

「ハイ！ 私も危ないところでした。ありがとうございます弘さん」

「いや、こっちこそさっきは天狗ちゃん。ありがとう」

僕がそう言つと天狗ちゃんは少し頬を赤くする。

「い・・・いえ、とと・・・当然のことしたまでです」

???

「あ！ そういえば天狗ちゃんって・・・泊まるところとかあるの？」

僕が聞くと天狗ちゃんはにっこりと笑い言う。

「いやあ、それが三日ぐらい前楓さんって人に話しかけられて、泊まるところがないって言つたら『しばらく家に泊まっていきなよ！』って言われて・・・」

そうか・・・だから楓は吸血鬼を見ても驚かなかつたのか・・・なんといつても天狗と一緒に住んでいるんだから・・・。そんなことを思いながら、僕はのびている吸血鬼をおんぶして自分の部屋に連れて行き、ベッドにそつと降ろす。

「天狗ちゃん！！ また暇な時遊びに来てもいいよー！！」

僕が玄関でげたを履いている天狗ちゃんに向かって叫ぶ。

「あ、ありがとうございます弘さん！！ じゃあ、今日はこころ入んでおいとまさせていただきます！」

天狗ちゃんはすぐくうれしそうな声を出して去っていった。

「ふう……さあ片づけだっ！！！」

僕は天狗ちゃんと吸血鬼が激しく争った部屋の片づけを始めた……。



## 第七話 吸血鬼と優

トゥルルルル……トゥルルルル。携帯電話の呼び出し音が僕の部屋に響き渡る。

「ん、誰だろう?」

僕はそう思いながら携帯をとる。

「よお! 弘! 吸血鬼と一緒にいるらしいな!」

携帯から優の元気な声が飛び出す………というか言いやがったあいつ。

「その情報どこから聞いたの!？」

「楓が喜びながら言ってきたぞ」

今度会ったらあいつ埋めなきゃ

「というわけで今から見に行くからな」

「えっ!? ちょっと待……」

僕が最後まで言い終わる前に優は携帯を切る。まったく人の話し聞かないなあいつは。

「どうしたの弘君」

相当僕は大きな声で話していたのか、吸血鬼がちよつとむくれている。

「んとねえ、僕の友達が今吸血鬼見るためにやってくるんだって」

「ふう、人気者は辛いわね・・・私ったら罪な女」

無視無視

「なんで無視するの弘君〜！」

「そついえば君！　なんかキッチンから焦げ臭いにおいがするよ！」

僕が吸血鬼を無視しながらキッチンに向かおうとすると吸血鬼が腰にタツクルしてくる。

「ダメ〜！！　私の最高傑作たまご焼き焼きスペシャル　を捨てないで〜！！！！」

すごいネーミングセンスだ。まあそんなことはいいとして、なんか火薬の臭いもしてくるから様子だけはみなければ心配だ。

「僕、吸血鬼が頑張つて作った卵焼きみたいなの。すつごく美味しそうなんだろうな〜（棒読み）」

「えっへん！　そんなに見たいのなら、見せてあげるよ〜」

誉められたらコロッと態度をかえる吸血鬼がなんか微笑ましい。

「どれどれ〜？」

………なんというかそれは、もう『食べ物』というより炭に近かった。

「美味しそうですね〜！」

吸血鬼がそう言いながらぼろぼろの炭（本人が言うには卵焼き焼きスペシャル）を僕の口に押し込もうとする。

「いや、ちよつとまって！ 自分で食べれる！ 自分で食べれるから〜！！！」

その食べ物とはいない『物』が口に放り込まれそうになった瞬間に、ピンポンとチャイムが鳴る。

「あ！ お客さんだー！ ごめんね吸血鬼。それは後で食べるよー（棒読み）」

僕は無理やり笑顔を作りながら玄関に向かって突っ走る。ありがとう優と思いながら扉を開ける。

「よう弘っ！！ あと吸血鬼はどこだー！！？」

優の元気な声が僕の耳に飛び込んでくる。

「今多分リビングにあるソファーにうまってるよ」

僕がそう言った途端優はリビングへ駆けて行く。相当興味津々のようだ。様子を見にリビングに行くと、吸血鬼と優が正座して向かい合っている。

「もしや・・・君が吸血鬼かい？」

おお！？やっぱ現実主義者なだけあって優の反応は普通だ！

「そうでございますが・・・そちらさまは弘君のお友達ですか？」

何！！？ 吸血鬼って敬語はなせたのか！！？

「ああ・・・だけど君は本当に吸血鬼なの？ 証拠とか・・・あるかな？」

「何！！？ 私を疑うというの？ このすべてお肌を見ても吸血鬼だと思わないの！？」

「そうだった。書物にあったんだが現代の吸血鬼はすべてお肌について記述が・・・」

何を読んだんだ優！！？絶対それ間違った記述だよ。

「でしよでしよー！！？」

吸血鬼は敬語が疲れたのもうタメ口になっている。やっぱり長続きしなかったか。そう思っていると優がツカツカと吸血鬼に歩み寄り・・・。

「おお！ ぶにぶにだー！！」

ほっぺたをぶにゅっと片手で掴む。

「やりするをひおむくんをおともうち！（何するの弘君のお友達！）」

「本当にすべすべだ〜！」

優は吸血鬼のほっぺに夢中になっている。気持ちわかるよ優・  
・。僕は寝ている吸血鬼のほっぺで遊びに遊んだのを思い出す。吸血鬼はむくれているがお肌のことを褒められて上機嫌で、優にされるがままになっている。

「あ〜、いきているうちに吸血鬼の肌触れるなんて感動だな〜」

相当優も上機嫌だ。でもさすがにずっと触るのは悪いと思ったのか、ほっぺたから手を離す。

「なあ、吸血鬼ってトランプとか知ってる？」

優がいきなりトランプを取り出す。吸血鬼と遊びたくてたまらない様子で、にこにここと笑っている。

「うん。ババ抜き大好き〜！！」

吸血鬼はにこにこしながらカードを配り始めている。五枚のカードが三人に配られる。

「それだっ！！」

吸血鬼は気合を入れて僕の手からカードを取る。そんなに一回づつ気合入れていたら身がもたないよと言いたい。

「よしっ!! 二枚揃った!!」

「ハイテンションだな〜吸血鬼って」

優は笑いながら吸血鬼を見る。

「もう元気すぎて困るよ〜」

僕は苦笑いしながら優の手からカードを取る。

「まあ、おもしろそうでいいけどな」

優はそう呟きながら吸血鬼からカードを取る。

~~~~~30分後~~~~~

「くっ!! またジョーカーなんてついてないわ!!」

残ったのは僕と吸血鬼2人だけで、とっくに優は勝って漫画を読んでいる。

「ふっふっふっふ。いつもの吸血のうらみをここではらさせてもらっしょー!!」

僕は叫びながら吸血鬼の手からカードを取る……!!

「ま、またジョーカー……」

流石にへこむ。さっきから2人ともジョーカーしか引かなくて、

永遠に終わらないのである。

「ぬう！ かくなる上はっ！」

吸血鬼が叫ぶ。・・・頭でも打ったかな？

「あっ！ 弘君。天がそこにいるよ！」

吸血鬼はそう叫び玄関のほうを指差す。

「えっ!?!」

思わず後ろを振り向くが、誰もいない。

「君！ 誰もいない・・・って!?!」

いつのまにか吸血鬼は僕に飛びついてきてカードを見る。

「いや、君それルール違反だから!?!」

「勝負は、勝てばよかるうなのだ!?!」

吸血鬼はどこかで聞いたことのあるような台詞をいいながら僕の手からカードを奪い取る。

「・・・それジョーカーだけだ」

「み、みぎゃあああ!?!?!」

吸血鬼は奇声を上げながらトランプを地面に叩きつけ、優はそん

な吸血鬼を見て笑っている。

「もうやめっ！ トランプやめようよ弘君！！」

吸血鬼はぷりぷり怒りながらトランプを僕に投げってくる。こうなったら聞かないんだからなあ。そう思いながら僕はトランプを片付ける。

「そつえば弘。吸血鬼って、どこにいたの？」

優はいきなり僕に意味不明な質問をする。

「ん？ なんで？」

僕が聞くと、優はちょっと照れながら言う。

「いや、俺も吸血鬼みたいなのが欲しいな〜って思ってた・・・」

公園に吸血鬼みたいのが何人も出没するのはないと思う。でもきらきらと目を輝かす優を見てるとはつきり言うのは可哀想なきがする。

「ああ、あれは運命的な出会いだっ たわ！」

僕が何か言おうとする前に吸血鬼はいきなり語りだす。相変わらずテンション高いな。

「私がお腹を空かせて公園のベンチに座っている時に、弘君が現れたのー！！」

「公園・・・と」

優は懐からメモ帳を取り出し吸血鬼の話をとるところどころメモしている。

「弘君は倒れそうになった私を抱きとめて、しかもだっこもしてくれたの」

「お前こんな小さな子にそんなことしたのか？」

「いや、あ、ああれはい、いきなり倒れたから・・・」

「その優しさに私の心はうたれたの！！ ああ、お腹空いたって！」

僕がどもっているのを遮り吸血鬼は語り続ける・・・っていうかなんでその流れでお腹空いたってという単語が出てきたんだ！？

「耐え切れない！ 私は吸血鬼の任務をまっとうすると心のなかで叫び弘君の首筋に噛み付いたの！」

「・・・ってことは弘も吸血鬼！！？」

「いや、噛みつかれたけど断じて違うよ！」

このままでは優との関係が壊れてしまうと思えばわてて否定する。優はよかったと呟きながらも懐から杭とにんにくの束を取り出す。なんでこんなものいつも持っているんだ！！？

「私は一心不乱に弘君の首からどくどくとながれる鮮血を・・・」

なんか表現がグロテスクになってきちゃったからこころへんで吸血鬼は止めておく。ジャンルがコメディーからダークになってしま
う。

「ん、気がついたらこんな時間だ。じゃ俺は今からちよっくらその公園とやらを探しに行くわー」

優はそんなことを言いながら玄関へとダッシュする。止めようとしたけれどその間もなく優は扉を開けて去ってしまふ。

「ふう、見つかるわけないのになー」

僕が呆れながら呟くと吸血鬼はふふんと鼻を鳴らす。

「でも、こつちでの生活は楽しいよって死神に言っておいたから、もうちよっとしたらふらつとくるって！」

ふう、また新キャラが増えるのか………騒がしい奴じゃないと
いいなあ。

「弘君!! お腹すいた〜!!」

吸血鬼は叫びながら僕の腕を引いてキッチンに連れて行こうとする………しまった! 卵焼き焼きスペシャルを処分していない!

「お料理する前にちゃんと私の料理食べてね〜」

吸血鬼が楽しそうに鼻歌を歌いながら逃げようとする僕の服を驚
づかみにしてひきつける。

僕が悲鳴をあげているのを無視して吸血鬼はにこにこしながら僕をキツチンという名の地獄へ連行した。

第八話 僕と天狗

「弘君！」

吸血鬼の元気な声が聞こえてくる。やっぱり元気だな〜そんなことを思いながらリビングへ行くとそこには吸血鬼がペットボトルぐらいの大きさの真っ赤な液体が詰まった瓶を持って待ち構えていた。ん〜、これは予想なんだけどかなり嫌な予感がするよ。

「今日はちょっと天使さんにお届け物をしなきゃいけないからお出かけるよ」

もしかして吸血鬼が外出？外出なのか！？……こんなチャンスめつたにない！今日は昼寝でも満喫しようかな〜。

「あ、そういうえばその赤い液体何？ 結構詰まってるけど」

「あ！ これ弘君の血だよ」

「ああ僕の血ね……………僕の血！？」

「もうっつこむの遅いよ弘君〜」

いや待てそういうことじゃないでしょ！

「いや！ いつの間にそんなにいっぱい血を手に入れたの！？」

「ふ…………あれは壮大なプロジェクトだったわ！」

なんか話が長くなりそうだなあ。

「はいはい」

「反応薄いよ弘君！」

吸血鬼はそう叫んだ後、コホンと咳をして話を始めようとする。

「まず、弘君が寝た時に布団に入り込んで首に噛み付いて少しずつ血を集めたの」

「少してどれくらいなの!?!」

勝手に寝てる間に僕の部屋に入ったことなんかより、これが一番問題だ。毎日とか言っているが吸血鬼のことだから350ミリリットルで三日とかいう恐ろしい結果になりかねない。

「たった300ミリリットルだよ！」

だから近頃よくくらっとして世界が暗転するのか・・・って真面目に殺す気か!?!

「いや前ダメだって言った量より多いんだけど!?!」

「あれはどきどきしたよ。なんてっ たってあそこで気づかれでもしたら弘君のパジャマの中にある板チョコを口の中に放り込まれちゃうからね！」

なんでそれを知っているんだ!?!というより何気に無視!?!習慣にしてない!?!?

「私の情報網を甘くみるべからず!!」

いやまだ何も言っていないんですが。

ぐぎゅつるるる……ジャポニカ!

「やばい。お腹時計が鳴ったということはもう時間ね! じゃあ行ってくるね弘君ー!」

……あれ本当に腹から出た音か!?

「今ジャポニカって聞こえたんだけど!？」

「ふ、少年。世の中には知らないほうが幸せなこともあるのだよ……がはははは!」

吸血鬼はそんなことを叫びながらはやてのように去っていった。……ああもうあの子のノリについていけない。そんなことを思っているピンポンとチャイムが鳴った。

「はーい!」

とりあえず返事をしながら玄関へ向かう。扉を開けた瞬間に天狗の仮面を片手に天狗ちゃんが飛び込んできた。

「弘さん! かくまってください!」

「あ、うんいいけど……」

何か必死なので入れてあげると、天狗ちゃんはほっとしたのかぺたんと廊下に座り込む。ぜえぜえと肩で息をしている。

「天狗ちゃんどうしたの？」

僕が聞くけど天狗ちゃんはぼくとしてしている。

「こんなところに座っていると寒いから、お茶出してあげる。こっちにおいで」

僕が廊下に座っている天狗ちゃんに手を差し出すと天狗ちゃんの小さなぷにっとした手が握り返してくる。が、天狗ちゃんはいきなりはっと我に帰った様でぱっと手を離す。

「あう、すみません弘さん。いきなり手を掴んじゃったりして・・・」

「いや、僕が先に手を差し出したから別にいいよ」

天狗ちゃんは少し後ろに手を組んでもじもじしていたがはっと思いついたかのように手を叩く。

「改めてお願いします。ここでかくまってください！」

天狗ちゃんは叫びながら頭を下げる。一体何があったんだろう？

「いいけど、何があったの？」

僕が聞くと天狗ちゃんはうつむきながら話し出す。

あれは私が楓さんの家に泊めてもらい始めてから四日たった日でした。楓さんはつきつきしながらいろんな種類のドーナッツが入った袋をもって家に帰ってきました。

「どこで買ってきたんですか？」

と私が興味本位で聞いたら

「優に情報と交換してもらったの。」

といていました。楓さんはチョコファッション以外は食べないでねと言いいながらシャワーをするためにバスルームに行きました。一人残された私は、チョコファッションがなんなのかわからないから、美味しそうなチョコが半分ドーナッツにかかったドーナッツを選び食べました。丁度食べ終わった時に楓さんがシャワーを終えてにこにこしながらドーナッツの入った袋の中を見た瞬間……

「見た瞬間どうなったの？」

僕は恐る恐る聞く。なんといても楓は食いしん坊で、給食のデザート最後の一口をクラスの中で力が強いガキ大将が食べたなら、ガキ大将は楓の手によって再起不能状態にされたのだ。

「もう地獄絵図でした」

楓さんが袋の中を見た瞬間どこから出したのか果物ナイフを取り出して私のほうに aimed あられのように投げてきました。命からがら家から脱出したのはいいのですが窓からすごい勢いでナイフが飛んできます。私はナイフの狙撃からなんとかのがれた時、弘さんの家の前についていたので、楓さんが落ち着くまでかくまっていたたく

ことにしました。

「そうだったんだ・・・長時間近づかないほうがいいよ」

「はい・・・」

僕は話し終わって高揚している天狗ちゃんを落ち着かせるためにすっと紅茶を出す。

「あ、ありがとうございますー！」

天狗ちゃんはそう言いながら急いで飲もうとしてあちっと言いなから紅茶を置く。

「私猫舌なの忘れてました」

天狗ちゃんはそういいながらふーふーと紅茶に息を吹きかけて必死に冷まそうとしている。

「ふふ」

そんな天狗ちゃんを見て思わず笑みがこぼれてしまう。たまにはこんなほのぼのしているのもいいかなと思ってみたりもする。

「弘さん。エヴァは相変わらず元気でやっていますか？」

天狗ちゃんが紅茶を少しずつ飲みながら聞いてくる。

「うん。元気すぎるくらい元気だよ」

「あんな子ですがどうかこれからもよろしく願います。弘さん
天狗ちゃんは少し頭を下げる。それにしても、本当に礼儀正しい
なあこの子。」

「いいよ。なんだかんだいっても楽しいし」

そう言っていると天狗ちゃんは少しだけ嬉しそうな顔をする……な
んだかんだ言っても吸血鬼のこと好きなのかな。

「そういえば天狗ちゃんって仕事とかあるの？」

僕はなんとなく疑問に思ったので聞いてみる。

「うーんとですね、悪魔さんから『甘いお菓子をいっぱい手に入れ
てきて』って言われました」

「へえ、難しい？」

「悪魔さん甘党だから中途半端に甘いものだと断られちゃうんです
」

「お菓子集めも意外と大変らしい。というか何故悪魔が甘党なんだ
!？」

そんなことを思っていると天狗ちゃんの持っている天狗の仮面が
いきなり光りだす。

「あ、悪魔さんからの通信だ！」

天狗ちゃんはさういって仮面を耳にあてぶつぶつと話し始める。

「あ、悪魔さんですか！？ あ、今弘さんの家について・・・え？
わかりました！」

「どうしたの？」

「何か新しい仕事内容を教えるから帰ってきなさいって言われまし
た」

天狗ちゃんはさう言い懐から扇子を取り出す。

「今日はかくまってくれてありがとうございます。また遊
びに来させていただきます！！」

天狗ちゃんが叫んだ途端部屋の中に突風が生まれ天狗ちゃんを包
む。風がおさまった時には、天狗ちゃんはいなかった。

「なんだかんだいって、天狗ちゃんもすごいなあ」

僕が呟いているとトゥルルルルと携帯電話が鳴り出す。

「はいもしもし」

「あ、平凡君！？ そっちに天狗ちゃん来てない！？」

なんか悪口を習慣にしようとしてないか？

「・・・・・・来てないよ」

「そう、じゃあもし来たら』もう怒ってないから速く帰ってきなさい』って言うておいて!」

「携帯の向こう側から何かを研ぐ音が聞こえるけど」

「シャリ・・・え? 気のせいよー・・・シャリ」

絶対果物ナイフのこと研いでるねー

「そういえば弘。優が『俺も手に入れたぞ弘ー!!』って公園で叫んでいたけどなんのこと?」

「んー僕もあんまりわからないなあ」

「・・・本当に新キャラ来ちゃったよ。というか本当にあのあと公園をうるついていたのか優!」

「そう、じゃあ私ちよつと研がなきゃいけないから切るねー」

楓はそう言いながら携帯を切る。相変わらずデンジャラスだな。

トウルルルル!!

「また電話か・・・」

いきなり鳴った携帯の画面を見ると、非通知設定になっている。

「一体誰だろう?」

僕は眩きながら携帯電話をとる。

第九話 天使と悪魔

「始めまして弘様。私は悪魔というものです」

携帯電話から聞いたことがない男の人の事務的な声が聞こえてくる。どうやらこの人は天狗ちゃんが言っていた悪魔らしい。名前を知っているのは多分天狗ちゃんが言ったからだと思う。

「こちらこそ始めまして。吸血鬼が何かしたのですか悪魔さん？」

「いえ、大変ご迷惑をおかけしますが、弘様には<こちら>に来ていただきたいのです」

「……何故ですか？」

当然僕は理由を聞く。

「吸血鬼が居候する権利書にサインしてもらっただけでは<こちら>では認められないので、弘様が直接<こちら>へ来て吸血鬼を正式に居候させる手続きをさせます」

悪魔さんは事務的な口調を崩さずに言い切る。

「ほ、本当ですか？」

「……実はそれは建前で、吸血鬼が『弘君来て来てー!!!』とだだをこね、私のパートナーの天使は『私もその子がみてみた……連れて来い!』と言っていたので」

天使さんとやらの言葉が最後は命令形になっているから多分抵抗しても無駄かなと思ひ、僕は大人しく悪魔さんの言うくこちらへ行くことを承諾する。

「ありがとうございますございます弘様。もし断られていたら私は明日天使に灰にされていたところでした」

悪魔さんの事務的な口調の中が少しだけ崩れる・・・天使さんの権力は相当なものらしい。

「では今からそちらへ向かいますのでしばしお待ちを」

悪魔さんが電話を切った途端、部屋の空気が歪み、真つ黒な穴が出現して、そこから黒いスーツを身にまとい真つ黒な長い髪を後ろで1つに束ねた端整な顔立ちのかなり美形のお兄さんが微笑みながら出てきた。

「改めて、始めまして弘様。私は悪魔と言つものです」

悪魔と名乗るお兄さんは僕に手を差し出す。僕はその手を掴む。

「こちらこそ始めまして悪魔さん。知っていると思ひますが、僕は黒沢弘です」

「そうですね。では自己紹介も済んだので、早速参りましょう」

悪魔さんがそう言うと・・・僕の意識はとぎれた。

「あゝもう本当に来るの?!?!?」

私はエヴァンナ。だがあるときは弘君の一目惚れした相手。またあるときは天使さんから仕事をもらうもの。または……。吸血鬼!!

「やった~~~~!!!! 私視点よ~~~~!!」

「うるさいですよエヴァ……。それ以上騒ぐと首から上が消失しますよ?」

さらつと危ない発言をするのは天使さん。髪が金色で黒いズボンをはいてて白いワイシャツを着ている……。なんか形容するのが難しいなあ。

「もうちょっとわかりやすく私を説明してください。読者様がイメージ掴みにくいでしょう?」

天使さんはそう言いながらどこに隠し持っていたのが巨大な弓を取り出す。

「いやあ、弘君がもし来たらお願いするから……。ダメ?」

「……。いいでしょう」

天使さんは弓を懐にしまつ。なんであんなワイシャツの中に巨大な弓が入るのは私にもわからないのですが、それが天使の七不思議

「エヴァ」

「ほえ〜？」

「貴方が視点になるといきなりくやめるんだカバオ君！>とかくマヨネーズは確保しました醤油大佐！！>とか意味不明な単語が飛び出すからやめなさい」

「え〜、やだやだ〜！！！」

「ほら、悪魔が弘さんを連れてきたようです」

「え！？ うそ！？ …… やつた〜！！！！！！」

本当に弘君が来るなんて、まさに棚からへそくりね！！

「リアルな事考えるのはやめなさいエヴァ」

「ほえ〜い」

気がついたら僕は、ぐるぐると回っていた。……自分がどこに立っているのかわからないような、地面がないような、とりあえずすごく気持ち悪い。

「あ、悪魔さん……これなんとかして快適に移動できません？」
「すみません。人間の貴方には少し不快かもしれませんがこれは私にとつて一番快適な移動手段なんです」

僕がなんとか言葉を搾り出したが悪魔さんはさらっと辛いことを言う。

「もうちょっとで着きますよ弘様。ほら、出口です」

悪魔さんがそう言うと、真っ黒なくにやにやした空間の中には不釣り合いなほど綺麗な白い扉が現われた。

「あれを4回ノックしてください弘様……4回です」

僕は必死でその扉へ行き、コン、コン、コン、コンとリズムよく4回ノックした。すると目の前には………吸血鬼。

「久しぶり弘君……!!!」

吸血鬼はそう叫びながら黒髪をなびかせて僕に飛びつき、がっしりとしがみつく。

「ちょ、ちょっと！ く、苦しい……!!」

相当な力で吸血鬼はしがみついているのか、腰の骨が軋む音がする。

「この方がエヴァの言ってた弘さんね」

女の人の声が響き渡る。無条件で人の気持ちを軽くさせる、澄んだ声だった。

「初めまして弘さん。私は天使です」

僕は吸血鬼に押し倒されながらも声がするほうを向く。

そこには、白いブラウスに黒いホットパンツを着こなしているすごく美人なお姉さんがいた。流れるような長い金髪は肩にかかるぐらいで、歩くたびにふわつと髪が浮きいい匂いがする。

「あ……は、初めまして天使さん。僕の名前は黒沢弘です」

僕がそう言うと満足そうに天使さんは頷く。

「ね？ 弘君に形容させたらイメージ少しは掴み易くなったでしょう？」

「そうですねエヴァ……貴方はこんな人が主人でいいですね。私が変わりたいぐらいです」

僕にのっかってる吸血鬼と天使さんが楽しく話しだすと、遅れて後ろから悪魔さんがやってきた。

「ふう、ただいま帰りましたよ」

「遅いわ、2秒遅刻よ。後でアーチェリーの的になりなさい」

……天使さんは、天使なのに悪魔でした。

「何故だったその程度の遅刻で！」

「気分よ」

理不尽な死刑執行を予定された悪魔さんはこういうことはよくあるらしく、しょうがないなあと呟いていた。悪魔さんと僕はパートナーで苦勞しているという共通点があることがわかった今日この頃。

「あ、君。そういえばここはどこなの？」

僕はいつまでもものっかっている吸血鬼をのけながら尋ねる。

「あ、ここはね………悪魔さんお願いします」

「それでは私が説明しましょう」

吸血鬼にいきなり振られたが悪魔さんは動揺せずに、説明を始める。

「ここは一般的に天界や天国と呼ばれているところで、弘様のいた世界とは違う世界なのです。全ての生き物が死んだ時にここへ訪れ、ここで第二の人生、いわばセカンドライフを送るのです」

「驚いた。ということはみんな二回は人生をおくるのか……」

僕がそう呟くと、悪魔さんはしかしといいながら話を続ける。

「生前の記憶は一切消え、自分が何者かも忘れてしまいます。セカンドライフがしたくないと言う人が稀にいますが、そのようなお方は元の世界で胎児から新しい人生を続けていくのです。これを一般

に輪廻といい……………」

その後悪魔さんの話は長々と続き、天使さんはアーチェリーの準備をし、吸血鬼は退屈すぎて僕の膝に頭を乗せて眠ってしまった。

……………はっ！！危ない危ない。僕も寝るところだった。

……………です！ 弘様はご理解いただけましたでしょうか？」

「は……………ハイ！ とつても！」

僕はとりあえずそう言うのと悪魔は満足そうな顔をして頷く。

「弘さん。もし時間があるのなら、少しの間こっちに来ませんか？」

天使さんの顔が僕に近づく……………ち、近い。

「あ……………いや、その」

綺麗な人に話しかけられるのはあまりないのでドキドキする。

「そう照れなくていいんですよ弘さん。どうせなら私と……………」

「却下だ！！ 却下却下！！」

「だめよ天使さん！ 弘君は私といつしよなのー！！」

いきなり大きな声を出したのは悪魔さんと吸血鬼だった。吸血鬼はいいとして、悪魔さんも大声出すんだなあ。

「天使はなんで私の誘いを断るのに弘様を誘うのですか!？」

悪魔さんは必死で叫ぶが天使さんはそんな悪魔を無視する……
・なんか僕は永遠にかなわない恋を目の当たりにしたような気が
した。というより悪魔さんいつきにキャラが変わってない!？」

「と、とりあえず興味あるから少しの間こっちにいさせていただき
ます……」

「ゆつくりしていつてね弘さん」

吸血鬼が後ろでもものすごくうるさいので僕はなんとかここに残
ることを承諾すると、天使さんは満足そうに微笑みながら言う。

「」ゆつくりしててください弘様。私は天使と……」

「悪魔……もし私の部屋に入ったら、血液が半分塩水になるわ
よ」

天使さんは悪魔さんが全部言い切る前に釘を刺す。悪魔さんはす
ごい勢いで拒否されてうなだれ……部屋の隅に行き体育座り
する。

「悪魔さんあれで大丈夫？」

なんとなく悪魔さんのへこみ具合が尋常じゃないので二人に僕は
聞いてみる。

「悪魔さんは天使さんといつもいっしょにいるけどへこみやすいん
だよ」

「大丈夫よ。一週間以内には立ち直れるわ」

吸血鬼は笑いながら言い、天使さんにはこっと微笑みながら言う。

「それは大丈夫じゃないんじゃない？」

「いいのよ……いつまでもあのままだと視界の端にちらちら映って不快になるから部屋に戻ってもらおうかしら」

天使さんはさらっと酷いことを言いながら悪魔さんに近づき何かを耳打ちすると、へこんでいる悪魔さんは肩を落として先程の「穴」を使い消える。

「天使さん。今何を……」

「さあ弘さんにエヴァはもう寝なさい　これ以上起きてるといいことないわよ」

僕の言葉を遮り天使さんは指を鳴らす……すると真っ黒な扉が出現した。

「……………これはもしかや22世紀の猫型タヌキが愛用していた！！！！？」

「たぬきか猫かどっちなにしてよ！！」

意味不明なことを言う吸血鬼はすごく興奮しているのか僕のツツコミを無視して手招きをし続けている。

「ほら弘君！ 速く行こうよ！」

すごく狂喜している吸血鬼はぼくっとして僕を掴みドアの中へ引きずっていく。

「弘さんもエヴァも、疲れたでしょうからゆっくりと二人でお休みください」

天使さんは優しくそう言って………静かにドアを閉めた。

第十話 観光決定

天使さんが扉を閉めたたん、目の前が一瞬真っ暗になり……
・気がついたら僕はホテルの一室のような所にいた。真っ白なしみひとつない壁。二つある木製のベッドの上には柔らかそうな布団がかかっており、壁には高そうな絵画が飾られている。

「こんな綺麗な来客用の部屋に泊まるの始めて〜!!」

吸血鬼はそう叫びながらお決まりのようにベッドに飛び込み、幸せそうな顔をしながらベッドの上ではたばたと手を動かしている。どうやらここは来客者用の部屋らしい。」

「弘君見て！ みの虫ごっこ〜!!」

吸血鬼が頭だけ出して楽しそうに布団にくるまってベッドの上をころころ転がっている。

「落ちないように気をつけ・・・」

「ふぎやっ!」

僕が忠告しようとした瞬間に吸血鬼はみの虫状態のままベッドとベッドの間にぐすつと鈍い音をたてて落ちてしまう。

「お、起きれないよ〜！ 助けて弘君」

「やれやれ、困った子だなあ」

僕はそう眩きながら吸血鬼のことをベッドとベッドの間から救出する。

「ふう、やっと出れたよ」

吸血鬼はそういったあと、お腹をさする……。

「どうしたの？」

「弘君……」

「ん？ 何？」

吸血鬼は何もいわずに僕に飛び乗って来て、両腕を背中に巻きつけて、口を大きく開けて……ってこれは!!!?

「いただきます!!!」

「え!? ちょっと待っ……」

僕が腕で防ぐ間もなく吸血鬼は僕の首筋に噛み付く。

「久しぶりだ〜！ 美味しい〜!!!」

吸血鬼はそんなことを叫びながらすごく美味しいのか、すごい勢いで僕の血を吸い始める。

「やめて〜!!! 死んじゃうよ僕〜!!!」

僕は必死に手をばたつかせて抵抗するが、吸血鬼は僕の両手を抑えつけて血を飲み続ける……このままだと本当に生命の危機！！

「あ！ 天使さん！」

僕はそう叫びながら誰もいない空間を指差す。

「えっ！？」

「嘘だよ」

僕は血を飲むのを一瞬やめて後ろを向いた吸血鬼の口に常に吸血を回避するために用意している板チョコを懐からとりだして吸血鬼の口の中に放り込む。

「ぬっ、はかったな……みぎゃあああ！！！！」

吸血鬼は奇声をあげてばたつと布団に倒れこむ。

「ふう、なんとか助かった……あれ？ なんか頭がクラクラするなあ」

突然僕は頭がくらくらしてきた……さつき吸血鬼に血をかなり吸われたからだと思っ。

「色々あつて疲れたし、寝るかな」

僕は吸血鬼を隣のベッドに運び布団をかけた後、ベッドに倒れこんだ。

「弘さん!! 朝ですよ!」

そう言いながら誰かが僕のことをがくがくと揺さぶる。

「ふあ・・・ふえっ?」

僕はがくがく揺さぶられながら空返事をするが、誰かは僕をずつと揺さぶりつつける。

「・・・私が直に吸血してあげてもいいのよ」

「起きます!!!!」

昨日吸血されたのを思い出し、僕は腹筋を使ってがばつと起き上がる。

「いい子ですね。弘さん」

そこにはにつこりと微笑む天使さんがいた。

「て・・・天使さん!??」

「・・・最終手段で本当に血を飲むところでした。飲まなくてなによりです」

天使さんはそう言いながら微笑む……天使さんのワイシヤツに血が大量についていて、口からもすこしだけ血が流れていて寝る前より頭がクラクラするのは気のせいかなー

「天使さん……美味しかったですか？」

「ええ、すつごく美味……血なんて一滴も飲んでませんよ弘さん」

飲みましたねこの人。確信犯ですね。

「まあそんなことより、エヴァを起こしてください」

「話ずらしましたね……」

「速く起こさないと悪魔と同じように血液を塩水に、臓器を脱脂綿に変えちゃいますよ」

さらりと凄くデンジヤラスな事を言う天使さんなのでした。……
……というより悪魔さん昨日部屋に入っちゃったんですね。

「今すぐ起こします！！！」

言われたとおりにしないと本当に悪魔さんの二の舞になってしまう
いそうなので僕は足早に吸血鬼の眠っているベッドへ行く。

「ほら君！！ 朝だよ！！」

僕がそういいながら吸血鬼を揺さぶると……。

「んにゃ……………なんだ等身大のチョコレートパフェが……………寝よう」

「……………そんな物はこの世にないっ!!!」

「ごめんなさい板子ヨコ姉さん！ もう馬鹿にしませんっ！」

僕がすごい勢いで突っ込むといつもはなかなか起きない吸血鬼が意味不明な言葉を発しながらがばっと起きて、その後時計を見る。

「……………うわお！ もう朝ごはんの時間だ！ 天使さんお願いしますっ！」

吸血鬼がすごい剣幕でまくしたてたとたん、青色の扉が出現した。

「ありがとうございます！」

吸血鬼はそう言いながら青い扉へ突進して中へ入る。

「天使さん、あれどこにつながってるんですか？」

「食堂よ……………弘さんも来ますか？ 来たかったら来て下さい」

天使さんはそう言いながら懐から弓をとりだす……………行かなきゃ殺す気だ。

「いい……………いかせていただきますっ！」

僕は青い扉に向かって走り出す。そんな僕を天使さんは、後ろで笑いながら見ていた。

「美味しい！！ 卵かけご飯おかわりー！！」

……食堂で吸血鬼はこれでもかというくらい卵料理を満喫していた。食べ終わった食器がテーブルの上に山積みになっている。

「朝なのによく食べるねえ……どこに入るんだか」

僕がそう呟くと吸血鬼が卵かけご飯を貪りながら……。

「我食べる故に我あり！！ なのよ弘君！」

どこかで聞いたことがあるような台詞を叫んでいる……それにしても毎朝こんなだったら食費がかさむだろうなあ。

「弘さんもどうですか？ お腹も空かれましたようし」

いきなり男の人の声が聞こえてきて、振り返るとそこには昨日とまったくかわらない姿の悪魔さんがいた。

「あ、ありがとうございます。悪魔さん……なんで無事なんですか？」

「あれは日常です。一日に一回は生命の危機に晒されるが、魔法でなんとか生きています」

「大変ですね……」

僕は怪獣のように卵料理を食い漁る吸血鬼を見ながら言う。

「そちらこそ……なんだか弘様と仲良くなれる気がします」

悪魔さんはそういいながらにこつと笑う。僕もつられて笑うと、青い扉の中から天使さんがやってきた。

ギロチン

「悪魔！ 今私の事を話していたわね……後で断頭台の試し切りの実験体になりなさい」

お決まりの理不尽な死刑宣告キターー！！！！！！

「な！？ そんな理由で！」

「まあいいじゃないの……首の1つや2つ平気でしょう？」

「……平気なんですか？」

思わず心配になって悪魔さんに聞いてみると悪魔さんは肩をすくめる。駄目みたいです。

「ごちそうさまでした……！！！」

吸血鬼の元気な声が食堂に響き渡る。吸血鬼はごちそうさまを言った後すぐに僕に向かって走り出す……なあんか悪い予感が……

「デザート……！！！！！」

「こっち来るな〜!!!」

僕は必死で狭い食堂内を走り回る・・・おいつかれたら最後、吸血鬼にとつてのスウィートなデザートになつてしまう。

「エヴァ、弘さんを観光させるんじゃないの？ そんなに追い詰めると断っちゃうかもしませんよ」

天使さんがそう言うと、吸血鬼はピタッと止まる。

「そ、そうだった!!! ひ、弘君!」

「な、何?」

いきなり名指しされて僕は少し後ずさりする。

「い、いいい、一緒に観光にいこう!!! 案内するよ!」

「ん・・・別にいいけど」

僕はこの後予定がないから、とりあえず吸血鬼の意見に賛成する。

「え!? 本当!・・・デートだデート」

吸血鬼はスキップしながらにこにここと笑っている。

「そうと決まったら行くのよエヴァ!」

天使さんがそう言うと、テェック柄の扉が現れる。

「じゃあ、いこうか弘君！」

吸血鬼が僕の服の袖を掴みながら言う。

「うん……天界ってどんなところなんだろう。楽しみだなあ」

僕はそう呟きながら扉に入る。

「弘さんも行ったし、さあテストの時間よ!!！」

「やめてくれえええ!!!!！」

背後で悲鳴をあげている悪魔さんの声と殺る気満々な天使さんの声が聞こえた……。

「……愁傷様……」

僕は扉を閉めながら誰にも聞こえないような小さな声で呟いた。

第十一話 吸血鬼と観光

「天界へようこそ弘君」

吸血鬼はそういいながら扉を閉める。すると急に目の前が明るくなる。

「天界って………屋台多いね」

僕は思わずそう呟く。なぜなら長い道にところせましと屋台が立ち並んでいるからだ。

「このエリアでは食べ物は大抵屋台で手に入るんだよ」

吸血鬼はそういいながら近くの『たこやき』と書いてある屋台に歩いていく。

「あ、まってよ」

僕は吸血鬼の後を追いつつ、たこ焼き屋へ入る。

「へいらっしやい!」

「………」

僕は吸血鬼や天狗ちゃん、悪魔さんに天使さんみたいな人たちをみてきたが、さすがにこれは開いた口がふさがらなかった……。

「どうしたんでえい! 人を変な物を見るような眼で見て!」

なんといつても、僕の目の前で話しているのは人ではなく……
・たこなのだ。

「君……なんでたこが日本語をしゃべれて仲間を屋台で焼いて
売っている理由を教えて欲しい」

僕はたこがしゃべるといふカルチャーショックをのりこえ、吸血
鬼に聞いてみる。

「ちょっと難しいから後で悪魔さんに聞いて」

「………まあ理由はともあれどんな生き物ともお話しでき
るんだよね？」

「まあそうゆうことです」

吸血鬼はあっさりと言つて、にこにこしながらたこにたこ焼
10箱ちょうだい！と叫んでいる。たこはまいどありいと江戸っ子
のような口調でお礼を言う。

「僕お金あんまりないけど大丈夫!？」

「大丈夫、お金は私が貸しにしといてあげるよ……
・トイチで」

なんでこんな小さいのにそんな用語しってるんだ!?!というより
僕を破産させる気かっ!そういうことを思っているうちに吸血鬼は
お金を払い終わり僕の袖を掴んで走り出す。

「さあ、次はクレープ屋さんだ〜!!!」

この子は食べ物にしか興味ないのか!!!? 吸血鬼にひきずられていると、目の前に『クレープ屋』と書いてある屋台がある。

「いらっしや〜い」

クレープ屋のなかにいたのは……カエルだった。

「何故カエル!!!?」

「ん!? あんちゃん失礼だな〜。クレープ屋といったらカエルだろっが!!!」

……それは間違っていると思います。

「カエルさん! さっそくですけどスブルーベリークレープ頂戴!
あ、弘君は何がいい?」

「あ、じゃあ僕はバナナクレープ」

僕達がそう言うと、カエルは慣れた手つきでクレープを作っている。

「カエルさんクレープ作るの上手いですねえ」

僕が思わず呟くとカエルは誇らしげにゲコゲコと鳴く。

「長年やってるからなあ」

カエルさんはそう言いながらクレープをあつというまに2つ作り
終え、吸血鬼と僕に渡す。

「やったー！　ありがとカエルさん！！　よし弘君、次はおでん屋
だー！！」

「……まだ食べ物買うの？　ちょっと休憩しようよ」

流石にこれ以上食べ物を買われたら真面目に破産してしまうので
止めておく。

「むっ、まあそれもそうだ」

吸血鬼はそう言いながら屋台の横にあるベンチに座る。

「弘君も一緒に座ろうよ……ダメ？」

吸血鬼は手招きしながら上目遣いで僕を見つめてくる。

「ダメ？　（もし座らないんだったら干からびるまで吸血しちゃう
ぞ）」

副音声が聞こえるのは気のせいかなー

「わかったよ」

僕が渋々座ると吸血鬼は笑顔になり、クレープをぱくぱくと食べ
始める。僕もクレープを食べる。

「弘君。それ美味しい？」

「うん」

「弘君！ それ少し食べていい？」

「ん……いいけど」

僕がクレープをあげると吸血鬼が本当に幸せそうな顔をしてクレープにかぶりつく……。本当にこの子は、食べることが大好きなんだなあ。

「じゃあ、私もたこ焼あげるね」

クレープを食べて相当ご機嫌な吸血鬼は、たこ焼の箱を袋の中から取り出す。

「あ……美味しそう」

たこ焼はほかほかと湯気をたて、マヨネーズとソースが絡められていていい香りを出している。

「はい弘君……あゝん」

吸血鬼はつまようじをたこ焼に刺して、僕の目の前に運ぶ。

「あ……って何でこんなラブコメみたいなことをせにやならないのだ……！」

あやうく自然に食べるところだった……危ない危ない。

「弘君！ こういう場合はやるしかないのよ！ お約束なのよ！」

「どんなお約束だ！！」

「嫌だ〜！！ そんなこつぱずかしいことなんてできない〜！！」

「……………逃がさないわよ」

吸血鬼が凄く笑顔になり万力のような力を込めて僕の襟首を逃げないようにがっしりとたこ焼を持っていないほうの腕で掴む。

「はい……………あ〜ん」

「……………いただきます」

僕が観念すると吸血鬼はにこにこしながら僕の口にたこ焼を放り込む。……………かなり美味い。

「美味しい？」

「うん。美味しいよ」

僕がそう言うのと吸血鬼は嬉しそうな顔をするが、何かを思い出したのか素早くベンチから立ち上がる。

「あ！ そうだ……………速くおでん屋行かなきゃー！ 無性に卵が食べたくなってきたよ！」

それはいつもでしょうが……………そういえば観光に来たはずなのに屋台しかみてないな。

「それより君。これは観光なんじゃなかったの？ どう見ても食べてるだけにしか見えないんだけど？」

僕がそう言っていると吸血鬼は本当に忘れていたのか、あーっそうだった！！と叫ぶ。

「そうだった！ じゃあ弘君。＜魔人ゴガギガイガ＞が生息する火山か、＜風神バギゴズ＞が生息する砂漠か、＜巨大ナメクジヌメヌメ＞が生息する湖の三つから選んで！」

ロクな場所ねえー！！！！！

「絶対それ行ったら獲って食われるでしょ！ てゆーかヌメヌメ以外濁点多くない!？」

「そう、ヌメヌメのところに行きたいのね」

「いや話聞こうよ!！」

まさかこんな人生の分岐点ぐらい重大な決断をするところで無視されるとは思わなかったよ。

「そうと決まれば出発じゃー！！ 野朗共たこ焼を忘れるなー！！」

そんな僕の沈んだ気持ちなど考えもせず吸血鬼は底抜けに元気な声で叫んでいる。

「何故たこ焼？」

「たこ焼は又メ又メの好物なんだよ。お供え用に必要なの」

ナメクジがたこ焼食うのか!?

「まあ百見は一触にしかずというでしょう!」

「……」百聞は一見にしかず』の間違いじゃないの?」

僕が訂正すると吸血鬼はバツの悪そうな顔をした後……

「そうともいう!」

開き直った。

「はあ……速く又メ又メに会いに行こうか」

「それもそうだね! しゅっぱーっ!」

吸血鬼は高らかに会いに行く宣言をした後、僕の服の袖を掴んで駆け出した。

第十二話 吸血鬼とヌメヌメ

「ほら顔上げて弘君！！ 着いたよ！」

吸血鬼が元気よく目の前にある湖をびしつと指す。

「おお、思っていたより綺麗だね。なんかもっと禍々しい色の湖だと思っただけど・・・」

そこは奇怪生物がすんでいるとは思えないほど綺麗な湖だった。真っ青な湖が光を反射してきらきらと輝いている。

「ふふん、なんといつても観光スポットだよ！ このエリアで一番綺麗な湖なんだよ！」

「うん・・・本当に綺麗だね」

僕が正直な感想をもらすと吸血鬼はどこか誇らしげな顔をする。

「でしょでしょー！ 天界好きになったかいあんちゃん？」

吸血鬼はそう言いながら僕の肩をばしと叩く。酔っ払ったサラリーマンがこの子は！

「結構ね・・・そういえば本当にこんな綺麗な湖に巨大ナメクジなんているの？」

「ふっふっふっふっ・・・まっぴり言っただよその言葉を！」

吸血鬼は怪しく笑い、懐から吸血鬼の身の丈ほどのもある釣竿を取り出す。

「どこにそんなでかいの隠し持ってたの!!?」

「女性に道具の隠し場所を聞くのはマナー違反よ!!」

「そ・・・そうなの!?!」

「さあ! ヌメヌメを釣り上げるわよー!!!!」

「・・・なんか無視されても別に苦じゃなくなってきたよ。慣れなくて怖いね。」

「弘君アシスタントお願い!」

どうせ断ろうとしても強制参加だから僕はおとなしく従う。

「・・・わかったよ」

「よし! じゃあ糸にたこつけて」

僕は糸にたこを一個くくりつける。

「よし準備完了!!」

「準備完了速っ!!」

これで終わりならアシスタント要らないじゃん!!

「未来へ届け！ 私のたこ焼き！！！！！」

そんな僕の思いをよそに、吸血鬼は妙な気合を入れてたこ焼きを湖の中へ放り投げる。

「よし、じゃあ後は糸が引くのを待つだけだから、弘君はそこらへんで休んでもいいよ」

「お！ 本当？ じゃあお言葉に甘えて・・・」

吸血鬼の好意に甘えて僕が寝ようとしたとき・・・。

「かかった！！！！」

「速っ！！！！！！」

餌に何かが食いついたみたいです。

「弘君も手伝って！！！！」

「わかった！！」

僕が駆けつけると、吸血鬼は鬼のような形相で必死にリールを巻いている。

「この手応え・・・まさに又メ又メね！」

いきなり本命！！？

「ふぬぬっ！！！！」

吸血鬼は必死に踏ん張っているがずると湖に吸い込まれていく。

「君！ このままだと沈むよ！ 危ないからリール放しなよ！！」

「放すもんかー！！！！・・・ってひやああ！！！！」

吸血鬼は一気に力負けしたのか湖にすごい勢いで引きずり込まれそうになる。

「ほら！ いわんこつちやない！」

僕はそう叫びながら必死に吸血鬼の足を掴む。……………これ本当にナメクジの力か！？かなり力が強い。

「くう……駄目だ。引きずり込まれる……！」

僕は少ししか踏ん張れずに、吸血鬼と一緒に湖の中に引きずり込まれていく……。

「ひやあああー！！！！ 私泳げないのおおー！！」

「それ先に言えー！！！！」

僕が叫んだ瞬間、僕らは湖の中へバツシャーンと派手な水しぶきをあげて飛び込んだ。

「じぼぼっ（溺れる）！！」

僕はこれ以上沈まないように吸血鬼の手から釣竿を奪い取り放す。

「ごぼつ（弘君助けてお願い。一生のお願い〜）！！」

何故少ししか息はいていないのにそんなに長く伝えられるんだ！
？という疑問は置いておいて、僕は吸血鬼の腕を掴んで水面へ浮上する。

「……………つはあ！！ 死ぬかと思ったよ！！」

「……………ツハア！ シヌカトオモイマシタ！」

「何故欧米化！？」

吸血鬼は元気だ……………ほつとした。

「弘君？ もしかして心配してくれたの〜？」

「沈めるよ」

僕はにっこりと仏のような笑みを浮かべる。

「すみません。もうふざけません」

背中越しに吸血鬼が震えているのが伝わる……………相当水が嫌らしい。

「よろしい」

僕はそう言いながら平泳ぎで陸に向かった。

「や、やっと着いた」

「ふう、首につかまるの疲れたよ」

僕らはいっしょにどさつとその場に倒れこむ。

「いやあ、それにしても危なかった。又メ又メ一本釣りは流石に無理だった」

「まったくだよ。君、ナメクジはナメクジでも巨大ナメクジなんだから、一本釣りは無理でしょ」

「だって・・・やってみたかったんだもん」

吸血鬼はそう言いながらむーっと頬を膨らます。

「はいはい・・・もう疲れたし、今日は帰ろうよ」

僕はそう言いながらゆっくりと立ち上がる。

「そうだね弘君。でも又メ又メ見てからにしようよ」

そっいいながら吸血鬼も立ち上がる・・・っつて、何!?

「・・・一本釣り以外にも方法あったの?」

「うんあるよー!! これすれば絶対出てくるんだよー!」

「……………それを先にやれー!ー!ー!ー!ー!ー!ー!」

僕は叫びながら吸血鬼のほっぺを両手でつねる。

「いひゃい、いひゃい~~~~!!」

吸血鬼は泣きながらぶんぶんと手を振って抵抗するが僕には届かない。

「……………君が溺れちゃったらどうするの!?!」

吸血鬼はびくつとたじろいだ後、本格的に泣き出す。

「うええ~~~~ん!! ごめんなさい~~~~!!」

「……………どうしてこんなことしたの?」

「だってえ……………弘君に……………イイとこ見せたかったんだもん」

……………僕は黙って吸血鬼の頭をくしゃくしゃと強めに撫でる。

「ひ、弘君?」

「ありがとね。嬉しいよ」

そう言つと吸血鬼はぱあつと顔を輝かせる。

「けど、もうあんな危ないことしちゃ駄目だよ！！ わかった!？」

「はい！ わかりました!!！」

吸血鬼は泣いているのか笑っているのか表情をしながらも、しっかりと頷く。

「よし……じゃあヌメヌメさん呼んじやってください」

「は〜い!!！」

吸血鬼は元気に返事をした後、たこ焼きの箱を取り出す。・・立ち直るの速い子だなあ。

「いでよヌメヌメ!! 我の前に姿を現せ〜!!!!！」

吸血鬼は豪快に叫びながら無数のたこ焼きを湖に放り投げる。ぽちやぽちやと音をたててたこ焼きが湖に落ちる。

「そのかけ声いるの?」

「んー、気分?」

「そうですね……」

そんなやりとりをしていると、ぶくぶくと湖が泡立つ。

「ほ……本当にあんなやりかたで出るのか……?」

「来るよ〜!!!!！」

バツシャーーン！！

すごく派手に水しぶきがあがり、<ヌメヌメ>が飛び出してくる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・でかつ！！！！」

もうそのナメクジ（ということになっている物）はでかいとしかいいようがない大きさだった。全身がぬめぬめとてかり、不透明な液がじゅるじゅると垂れている。

<呼びましたか？>

しゃ、喋ったぞこのナメクジ！！・・・・・・・・そうだった。この世界の生き物はみんな『天界語』が話せるんだった。

「こんにちはヌメヌメさん！ 私はいつも来きているエヴァンナです！ で、こっちの男の子が弘君っていうんです！」

<そうですか。弘さん、私はヌメヌメと言つものですが・・・・驚いたでしょう？ いきなりこんな大きなナメクジが話すものだから>

ナメクジなのにすごい礼儀正しい！！

「い、いえ！ とんでもないです！ ヌメヌメさんこそ、お忙しいのに現れてくれてありがとうございます」

<いえいえ、私はあまり多忙ではないのでいつでも来てください>

「はい！」

僕が返事をするとなメなメは気をよくしたのかゆっさゆっさと体を揺らす。

「それよりなメなメさん！ いつもみたいに掘り出し物ない？」

吸血鬼が元気よく聞く。

<あつたよ。ほら、これなんてどうかな？>

なメなメがそういつたとたん、バシャーっとな派手な水しぶきをあげて円盤のような物が陸に放り投げられる。

「……これは……！」

「それ何なの？」

円盤のようなものを見て以上に興奮している吸血鬼に僕が聞く。

「これは正義のヒーロー滅殺王ルシファーが愛用する七大武器のひとつ、<刈り取りディスク>だよ……！」

何故正義のヒーローが魔王のような名前で、そんな残酷な武器を持っているんだ！？

「ふふふふ、これで残る武器はあと4つね」

吸血鬼はもう3つも集めちゃってるようです。

<気に入ってくれたかい？>

「うん！　ありがとうヌメヌメさん！」

ヌメヌメさんはまた気分をよくしたのか、ゆっさゆっさと体を揺らす。

「じゃあヌメヌメさん。今日は少し疲れたので、帰らしていただきます」

<わかったよ。また来てね>

僕がそういうとヌメヌメさんは湖の中から触手のような物を出しぶらぶらと振る。

???

「バイバイって意味だよ弘君」

「あ！　そうか・・・さよならヌメヌメさん！！」

僕と吸血鬼はぶくぶくと沈んでいくヌメヌメさんに向かって大きく手を振った。

「弘君・・・」

吸血鬼はヌメヌメさんが沈みきると、少し改まって言う。

「何？」

「今日は・・・ごめんね」

吸血鬼は暗い顔をしながらうつむく。

「いいよ……ほら元気出して。そんな顔にあわないよー」

僕がそう言いながら吸血鬼のほっぺをむにゅっと掴むと、吸血鬼はばあつと顔を輝かせた後、僕に寄って来て手を握る。

「よし！ じゃあ帰ろうか弘君！」

「……何となくさにまぎれて手握ってるの？」

僕がそう言っていると吸血鬼は少し悪戯っぽく笑いながら上目遣いで見つめてくる。

「だめー？」

「……別にいいよ。帰ろっか」

根負けして僕が認めると、吸血鬼はにこっと子悪魔的な笑みを浮かべながら改めて僕の手を握る。

「イエーイ！ やったぜー！！」

「ふう……やれやれ」

僕は肩をすくめながら、吸血鬼はにこにここと笑いながら一緒に手を繋いで帰路についた。

第十二話 吸血鬼とヌメヌメ（後書き）

もう少し天界観光は続きます！

第十三話 天界での朝

「みんな、中間の期末テスト配るぞ」

「うわっ！」

先生の一言で僕は目が覚める。どうやら居眠りしてしまっていたようだ。

「テスト楽しみだな、弘！ 今回も70点かな？」

優が楽しそうに僕に囁く。

「むー！ 今日こそは80点台来るよ。自信あったんだから！」

「ほ・ん・と・うかな〜？」

いちいち区切るところが優の性格の悪さを表していると僕は改めて思う。

「無理無理」。弘は一生平均平々凡々男よ」

よこから楓がいつもどおり楽しそうにへこむような事を言う。なんか段々これにもなれちゃってきたよ。

「弘君？ 人に虐げられることに慣れたら人生終わりだよ」

「そこまでいわなくてもいいだろ。喰らえ弘チヨップ！」

「ここまでいわれると流石にカチンと来るので手刀を楓に食らわせようとする。・・・というか自分で言っておきながらなんなんだけれど弘チヨップはちよつとダサイかな？」

「黒沢く、呼んでんだから速く来い」

丁度弘チヨップが楓に当たる寸前に、先生が僕の名前を呼ぶ。僕は軽く返事をして、テストを持つ先生に向かってゆっくりと大またで歩み寄る。・・・やっぱりテスト結果をもらう瞬間は緊張する。

「今回は・・・どうですか？」

恐る恐る聞くと、先生はにっこりと笑う。・・・この笑みは！？

「よかったな黒沢、今回は・・・」

「あ、あれ？」

気がつくと僕は清潔なベッドの上に横たわっていた。じゃあさっきのは夢かな？よく覚えてないけどとてもおしかった気がする。

「そつえばいいのはどい？」

僕は上半身だけを起こして寝ぼけ眼で辺りを見ると、黒髪でショートカットの小さな女の子がベッドとベッドの間にはさまって寝て

いた。……そうか!!

「思い出した！ 僕は昨日からここに遊びに来てたんだけ……」

僕はお父さんに連絡するために携帯を出そうとしたが……やめた。そういえばお父さんは1年ほど前に家事の内容をびっしりと書き込んだメモを残して単身赴任に行っていていないんだった。お母さんは僕が生まれた後すぐに死んでしまったらしい。そんなことを考えていると、目の前に真っ黒な扉が現れて、コンコンとノックされる。

「はい。何ですか？」

「おはようございます弘様。もう午前11時ですよ」

扉の中からはいつもど通りの真っ黒なスーツを着こなした悪魔さんがやってきた。

「食堂への道は開けておきますので、吸血鬼を起こしておいてください」

悪魔さんはそういった後軽く微笑む。……なんか今更だけど悪魔さんってかっこいいなあ。思わず魅入ってしまう。

「どうかなさられたのですか弘様？ 私の顔に何かついていませんか？」

「い……いえっ……なんでもないです」

流石に見つめすぎたのか悪魔さんは少し不思議そうな顔をする。

「そうですね、では速く天使のもとへ行かないと五体不満足にさせられてしまうのでここらへんで私はおいとまさせていただきます」

「わかりました。僕もできるだけ速く行きます」

悪魔さんは軽く頭を下げた後扉の中へ消える。そして僕はベッドとベッドの間に挟まってしている吸血鬼の事を起こす作業にかかる。

「ほら君！ 朝だよ！」

そういいながら僕は吸血鬼のほっぺをぶにと掴む・・・やっぱりいつ掴んでも柔らかいなあ。もちろん吸血鬼は起きないから、調子にのってぼくは吸血鬼のほっぺで遊び・・・ってデジャヴ！！？

「ほら、速く起きないと食堂しまっちゃうよ！！」

前と同じ事態になるのは避けたいので僕は名残惜しいけどほっぺから手を離して叫びながら吸血鬼の頭をぼんぼんと叩く。おお！髪サラサラだ！

「ん、ん〜ん・・・弘君！！」

吸血鬼はがばっと起きた後自分の髪で遊んでいる僕に渴をあびせる。

「乙女が寝ている間に何をしているの！！？」

自分のことを乙女とかいう女の子なんているのか！？と言いたい

ところだけど僕は今寝ている吸血鬼の髪で遊んでいたから反論はできない。

「あ、あの……すいませんでした」

「ここは素直に謝るのが吉だ！必死な思いで僕は頭を地面につける……っというか中学生がこんな小さな子に土下座って……」

「んむ、それでよろしい」

吸血鬼はそう言いながら僕の背中に乗って馬乗り状態になる。

「はいよ〜！！ 食堂までレッツラゴ〜！！」

その表現なんか古いよ！！と僕は言いたい。だけど何気に吸血鬼の声から怒気が出ているので素直に従い扉の前までお馬状態で進む……吸血鬼結構重いな。

「……弘君、今ちよつと重いなとか思っていないかった？」

「す、スルドイ。鋭すぎる！！」

「い……いえ、わわ、わたくしめは」

図星で冷や汗をダラダラと流している僕の首筋にひやりと金属のような冷たいものが押し付けられる。

「弘君？ 昔試し切りは木とかじゃなくて人の体でやっていたんだよ……フフフ」

怖い！！絶対僕の事を切る気だ！！こんなに生命の危機を感じたのは楓の大事にとっておいたショートケーキを食べたのがばれた時以来だ！！

「昨日又メ又メさんからもらったディスクの試し切り第一号は弘君だな」

吸血鬼が楽しそうに呟く。このままだとまじで殺られる！！

「す、すみませんお嬢様！ 今日一日言うこと聞きますのでどうかそれだけはご勘弁を！」

もう完璧に主人と従者みたいな関係になってます。

「・・・それでいい」

吸血鬼はそう言いながら僕の首に押し付けていた金属を懐にしまふ。ほっ・・・危なかった。

「それでは執事。このままの体制だと遅いからおんぶしてもらえますか？」

「はっ！ 仰せの通りに」

僕は元気よく返事をして吸血鬼をおぶる。なんか執事って楽しいな・・・って何ノリ気になっちゃってるんだ僕は！？

「さあ急ぐのだ執事！ 私のお腹は待つてくれないぞ！！」

「はっ！」

僕は吸血鬼に急かされながら、急いで食堂へ駆けていった。

「おはよう弘さんにエヴァ」

僕等が食堂にはいると天使さんは爽やかに笑いながらむかえてくれた。金髪がふわっと浮きいい匂いがする。やっぱり天使さんは美人だな。そう思いながら見ていると・・・。

「痛いっ！」

吸血鬼に後頭部殴られました。

「なんで叩くのですかお嬢様？」

「気分」

・・・この野郎

「あ！　そういえば天使さん。悪魔さんの姿が見えませんが」

悪魔さんが天使さんの側にいないからとても心配になり聞いてみる。

「私の部屋でぐっぐっぐっぐと眠っているわ」

天使さんはこれ異常ないほど爽やかな笑顔で答える・・・かなりの確率で永眠中ですね。

「そついえば弘君!」

吸血鬼がいきなり僕に向かって叫ぶ。

「何でしょうかお嬢様」

「主人と執事ごっこつかれたからやめよ」

「そつだね」

僕がそついった後吸血鬼は、よいしょとお年寄りのようなかけごえを発した後僕の背中からおりるため華麗に跳び、地面に・・・激突しました。お約束ですね。

「う・・・うっう・・・」

そんな呑気なことを思っているうちに吸血鬼が泣き出しそうになる。泣かれると心が痛むので僕は吸血鬼に駆け寄る。

「痛い痛い飛んでけー!!」

僕は吸血鬼がぶつかつた部位に手を当てて真剣に叫ぶ。すると吸血鬼は泣くのをやめてふふふつと笑う。・・・今更だけどあんなこと真面目に言っただけで恥ずかしい。

「弘ちゃん、顔が真っ赤でちゅよ」

天使さんが楽しそうににこにここと笑いながら僕に近づいてきて赤ちゃん言葉で囁く。

「ち、ちち、近いです天使さん!!」

美人さんにからかわれて僕の頭はオーバーヒート寸前だ。穴があったら入りたい。

「弘ちゃんは可愛いわね」

そういいながら天使さんは僕の事をぐいっと抱き寄せようとする。
・・・もうダメ〜!!

「エヴァ・・・弘さんには刺激が強すぎましたかね？」

「ちょっとそうみたいですわね」

そんなことを話しながら天使と吸血鬼は真っ赤な顔をして気を失っている弘を見る。

「ふふつ。でも純粹で可愛いじゃないですか」

天使はのびている弘をみて穏やかに微笑む。

「そこが弘君のいいところなんだよ!!」

吸血鬼は元氣よく叫ぶ。天使はそんな吸血鬼を見てもう一度穏やかに微笑んだ。

第十四話 買い物に行こう

「さあ！ 起きるのよ弘君！」

僕はいつの間にか寝ていたらしく吸血鬼に襟首をこれでもかと言うぐらいの力で揺さぶっている。・・・わあ、目の前に星がいつぱい。

「やめてやめて！ 脳震盪になる！」

「ほら弘君！ 今日滅殺王ルシファアの七大武器買うために買い物に行くよ！」

必死に叫ぶ僕を無視して吸血鬼は話を進める。つとつかまだルシファアネタか・・・結構お気に入りなのかな？

「そんなのどこに売ってるの！？」

「天界の超人気商品でおもちゃ売り場にいっぱい売ってるよ」

何故凶器をおもちゃ売り場に置くんだ！？という一言に尽きる。

「なんでそんなに人気商品なの？」

「滅殺王ルシファアの七大武器の人気の秘密はそのデザインの良さよ！！」

吸血鬼は誇らしげに笑いながら綺麗な円盤を懐から取り出す。

「この円盤の美しさ！ 細かに散りばめられた装飾！ ワンタッチで飛び出る無数の刃！ そしてこの触り心地のいいグリップ！！
そして……む……む……！」

話が長くなりそうなので僕は手で吸血鬼の口を塞ぐ。

「ほら速く行くんだっただら行くよ」

「それもそうだね！ 天使さんお願いします！！」

吸血鬼が叫ぶと目の前にどこからともなく赤い扉が現れた。今更
だけどうやってあの扉出しているのだろうかと思議に思う。

「ありがとう天使さん！ よし！」

吸血鬼はにこ……と仏様のように柔和な笑みを浮かべながら僕の
腕をがっちり掴む。………なんかすごい嫌な予感がするよ。

「行くぜえ……！！！」

「え、ちょっと待っ………うわああ！！！」

吸血鬼は元気に叫んだ後僕をかなりのスピードで引きずりながら
扉に突進する。なんでこんなに力あるの！？というより両足が地面
をこすっ……てすっ……ごく痛いです。

「痛いよイタイ！ 引きずってるよ！」

「聞こえんなあ……！」

吸血鬼はがはと豪快に笑いながら僕を引きずり続ける。

「返事してるってことは聞こえてるん……イデっ!」

僕の頭が扉の段差にゴツッと当たる……痛いよお。目の前に星がちかちかと瞬く。

「……ほら弘君! ついたよ!」

その声に気がついて目を開くといつのまにか僕はデパートのようなどころにいた。

周りには吸血鬼ぐらいの小さな可愛らしい子供達が円盤状の凶器をフリスビー代わりにして遊んでいる。

「君! あれ絶対昨日見た七大武器だよね!? あんな振り回していいの!?!」

「大丈夫! でも油断したら駄目だよ。飛んでくるから」

だから床に血痕があるのかー……って怖いよ!

「弘君危ない!」

「え?」

僕が振り向いた瞬間首筋に痛みが走る……もしかしてディスプレイが!!!?

「やっぱり美味C……!!!!」

吸血鬼でした。

「何どさくさにまぎれて吸ってるのー!!」

「うん！ このコク、ノドごし!! やっぱり美味しいなあ〜」

吸血鬼はいつもどおり僕の話の話を聞かずにつつとりとした表情を浮かべている。

「幸せそうな顔してるところ悪いけどデザートだよ〜」

僕は自分が出来る精一杯の笑顔を浮かべながら吸血鬼の口にこういうときのためにあらかじめ用意しておいたチロルチョコを押し込もうとする。

「NO！ チョコ撲滅！」

吸血鬼は意味不明な事を言いながらバツととびのく。・・・避けちゃったか。

「それよりも弘君！ 速く買いに行こうよー!!」

吸血鬼は口から（僕の）血を流しながら元気に言う。

「口に血ついてるよ」

「えっホント？」

「うん。拭いてあげる」

僕はポケットからポケットティッシュを取り出してぶくつとした吸血鬼の唇付近についている血をぬぐう。吸血鬼はあまり抵抗せず、に何故か嬉しそうな顔をしている……なんでだろ？

「よし、改めて買いに行こう!!」

「はい」

「元気がないぞひうるむくおん!!」

んん、幻聴だね。僕は出来るだけ聞こえない振りをしてトトトト歩き出す。

「無視しないで!!」

吸血鬼はそう言いながら頭の左側面に狙いを絞ったハイキックを飛ばしてくる。

「もう見切ったよ!!」

意気揚々と僕は叫ぶが………当たっちゃいました。意外と速かったんです………頭イタイ。

「ほら弘君。頭おさえてないでおもちゃ売り場へちゃっこうだー!!」

「直行………の間違いじゃないの?」

。僕が間違いを指摘すると吸血鬼は少しバツの悪い顔をした後・・・

「そつとも言っ!」

開き直った。

「ここがおもちや売り場か。でも人がいすぎてよくわからないね」

僕は思わず呟く。

なぜならそこは例えるなら祝日の映画館。例えるなら東京の朝の列車内。例えるなら30分タイムセールで25分経過した後の状態・・・最後のそんなに混んでる例えになつてないかな?

「おお!これはルシファアの相棒サタンの人形だ!か、かつこいい!」

吸血鬼はそういいながらきらきらと瞳をこれ異常ないほどに輝かせている。よく見ると周りにいる子供達もみんなはじけんばかりの笑顔を浮かべながら人形または凶器を見つめている。

「あんまり叫んじゃだめだよ。他の人の迷惑になるからね」

「はい」

とりあえずあのままだと公害物になりそうなので軽く止めておく。僕はあまりにみんなが魅入っているので少し興味が出てきてすぐ近くにある人形を手取る。

『邪悪な組織ジャステイスの参謀ジャステイライザー！ 必殺技はジャステイスキックでそれが効かない相手は合体ロボジャステイスマルクでボッコボコだ』

大体予想はしていたが思いつきり敵組織名『正義』なのは聞き間違いかな？でもキックが効かなかったらロボット使うあたりに悪を感じるよ。

「弘君！！ これ買って！！」

そんなことを思いながら人形を見つめていると、子供達の中から吸血鬼のひときわ元気な声が聞こえてくる。

「ん？」

僕は声のしたほうを見ると、カートの中にあるおもちゃ（凶器）をガツチャガツチャと怪しい金属がぶつかり合う音を立てながら吸血鬼がこれ異常ないほど顔をひきつらせて・・・じゃなくて、笑いながらやってきた。

「弘様！ 今日昨日のたこ焼&クレープの恩返しと言っことでサタンの五大武器を全部買ってくださいお願いします！！！」

吸血鬼は（作り）笑いを崩さずにびしっと僕にお辞儀する。あれ・

・・・なんか周りの子供達の視線がイタイ。

(お兄ちゃんのかせになんで子供に買わせようとしてるんだよ)

(あんな小さい子におもちゃを買ってやることもできないなんて貧乏な奴だな)

(買ってあげなよ。可哀想だよ)

「な・・・何円ぐらいな、ななな、なの？」

子供達のきつい視線に耐えながら冷や汗を流しつつ聞いてみる。

「さんまんはっせんはっぴゃくえん」

「払えねー！！！！」

この子は本気で僕を破産させる気なんだね。なんでおもちゃが五個でそんなに値段がはるのかはいいとして、何故こんな高額商品を買えない僕が悪いみたいなの雰囲気になってるの！？店員さん・・・貴方まで！！

「一個だけ！ 一個だけならいいよ」

このまま何も買わないとおもちゃ売り場に来る(つれてこられる)たびに白い目で睨まれてしまうのでとりあえず一個だけ買うという条件を吸血鬼に提供してみる。あ、少しだけ周りの視線がゆるくなつた気がする。

「ありがとう弘様！ 私はもう貴方の物になってもいいぐらいです！」

吸血鬼はおおげさに喜ぶとカートの中身を減らしていき最後にはとてもおもちやとはいえないほど禍々しい剣が残った………
なんか説明が怖そうだから効かないでおこう。

「じゃあバナラさん！　お願いしま〜す！〜！」

吸血鬼は定員さんらしき人の名前を呼びながら子供達を避けてレジへ直進する。

「あ、待ってよ〜！」

僕も吸血鬼の後ろから歩いてついていく。

「こんにちはエヴァンナちゃん。あ、初めまして。僕はバナラって
います」

レジに立っている店員さんは、吸血鬼に向かって微笑んだ後僕に
向かって自己紹介をする。

「こちらこそ初めまして。僕は弘っていいいます」

僕は握手をするために膝を折って前かがみになる。何でこんなこ
とをしなければならぬのかというと、その店員さんは吸血鬼と同
じ背ぐらいの男の子だったからだ。

シルクハットを深々と被り、真っ黒なスーツを着ていて襟元から
は白いワイシャツが少し覗いている。

「弘さんはエヴァンナちゃんの友達なんですか？」

「うん。そんな感じ」

「違うよ！ 私達はカップルなのよ！！」

ん〜、何トチ狂ったことを言ってるんだろこの子は。ほらバナラちゃん・・・バナラ君が凄いい目で吸血鬼、じゃなくて僕を見るじゃないか！

「ち、ち違うよ。僕ロリコンじゃないよ！」

少し焦りながらそういうと、バナラちゃん・・・もうちゃんのほうが似合うからちゃんていいや。バナラちゃんは誤解を解いてくれたのかにこっと微笑む。

いい子だ。

「それにしてもバナラちゃん・・・バナラ君はここで何をしてるの？ アルバイト？」

「あ、言い直させるのも悪いから言い直さなくていいです。僕は・・・ここでアルバイトやっています」

バナラちゃんはそういいながらはにかんだ笑みを浮かべる・・・
・やっぱいい子だ。しかも可愛い！！！！

「小さいのにアルバイトなんて。偉いね」

僕は思わず初対面なのに優しくバナラちゃんの頭を撫でる。ちょっと馴れ馴れしすぎたかな？

「あ……ありがとうございます」

バナラちゃんはうつむきながらお礼を言う。ぷにぷにしたほっぺたが赤くなっている……風邪ひいてるのかな？

「私の時と違うー!!」

バナラちゃんのことをじっとみているといきなり吸血鬼が僕のすねをキックしてくる。んゝ、痛い。

「もしかして、エヴァンナやきもち焼いてるゝ？」

そんな僕達を見てバナラちゃんがニヤリと笑った……ような気がした。吸血鬼はそれを見ておもしろいように赤くなってぶんすか怒ってる。はあ、子供なんだから。

「むづゝ！ 弘君！ もうおもちゃ買ったから帰るよ!!」

叫びながら僕の腕をがっしり掴んで歩き出す。

「わかったよ……じゃあねバナラちゃん」

「はい……あの、弘さん」

「何？」

僕はバナラちゃんに呼び止められて引きずり進行中なので顔だけを向ける。

「またいつか来てくださいね」

バニラちゃんはにこ〜っと可愛い営業スマイルのような笑顔を見せる。……ここのおもちや屋が繁盛してる理由が分かった気がする。

(笑顔……可愛い)

あ、今声に出たかもしれない。そう思ってバニラちゃんの方を見ると真っ赤になってうつむいてた。

やっぱり、あんな赤いということは風邪ひいてるんだ!!

「速く風邪……治るといいね」

僕は誰にも聞こえないような小さな声で呟いた。

第十五話 僕と悪魔と時々バニラ

サンサンと照りつける太陽。

雲ひとつない青空。

周りに咲く色とりどりの花達。

シミーつない真っ白なテーブルクロスが掛けられた机。

そして僕の目の前には砂糖を入れすぎてドロドロになっている紅茶と……。

「ささ、冷めないうちにいただいでください弘様」

これ以上ないほどの微笑みを僕に向けている悪魔さん。

なんでこんなことになってしまったんだ!?

僕は必死に思い出す。

――
――
――

「弘様起きてください」

誰かが僕のことを揺さぶる。

「お、おはようございます！」

天使さんや吸血鬼だったら早く起きないと大変なことになるので、僕はガバツと勢いよく毛布をどかしながら起きる。

「おはようございます弘様」

そこには悪魔さんがにこっと微笑みながら僕のベッドの脇でたたずんでいた。

「おはようございます。なんか毎朝ありがとうございます」

そういえば昨日も起こしてもらったのを思い出して軽く悪魔さんに会釈する。

「いえいえ……それより弘様。提案があるのですが」

「何でしょう？」

「今日は天使と吸血鬼がいないので、私と一緒にお茶でもどうでしょう？」

「……………へ？」

横にあるベッドを見ると、確かに吸血鬼がいない。

「な、なんで僕なんかと？」

「理由は少し弘様とお話しがしたいということと……………話し相手がないからです」

要約すると寂しいんですね悪魔さん。

「わかりました悪魔さん。一緒にティータイムを楽しませていただきます」

「ありがとうございます」

悪魔さんは事務的な口調で言いながらも無邪気にくっくと笑う。

僕はいつも大人な悪魔さんの子供のような面を見た気がして、思わず笑みがこぼれた。

—————

—————

—————

これで今に至るわけか……………ああ僕のバカ！なんで悪魔さんが甘党だったというのを忘れていたんだ！

「弘様？ お飲みにならないのですか？」

そんな心の中で悶えているということはつゆ知らず悪魔さんは砂糖入れすぎの紅茶・・・略して砂糖茶をすすめてくる。

「いえ、僕は猫舌なので冷めるまで待ちます」

僕はなんとか砂糖茶を飲むまいと必死で嘘をつく。少し罪悪感が芽生えるけど仕方がない。あんな物飲んだら糖尿病になってしまう。

「そうですか。それより弘様、昨日はおもちや屋で誰かに会いましたか？」

悪魔さんは僕にお茶を勧めるのをやめて話を切り出す。

「ええ。バナラちゃんって言う可愛い男の子に・・・ってなんで僕達がおもちや屋にいったこと知ってるんですか？」

「吸血鬼が楽しそうに話してくれました・・・それより弘様、バナラと言う子に会ったのですか？」

悪魔さんは緊張しているのか、少しだけ手が震えている。

「ええ。可愛い子で、少しだけ仲良くなりました。あんなに小さいのにアルバイトなんて偉いですよね」

「弘様・・・そのバナラと言う少女はもしかしてシルクハットを被っていましたか？」

悪魔さんはもう目に見えるほど動揺していて、カップを持つ手がかたかたと震えている。・・・というかバナラちゃん女の子だったんだ。まああの容姿だしなこともないけど。

「はい……どうしたんですか悪魔さん？ 顔色悪いですよ？」

「いえ、それより弘様。これから言うことを驚かないで聞いていた
だきたい」

「い、いきなりどうしたんですか悪魔さん？」

いきなり真顔になった悪魔さんを見て逆に僕が少し動揺する。

「実は弘様……」

トウルルルル！！

悪魔さんが話を切り出そうとしたときにタイミングよく電話が鳴る。

「誰だろ？ タイミング悪いなー」

携帯を見ると、災厄の権化と表示されていた……吸血鬼からか。

「あ、少し待ってください悪魔さん」

「は、はい。いくらでも待ちますよ」

僕は少しだけ席を立ち机から離れたところへ移動してから通話ボタンを押す。

「はいもしも・・・」

「こちら吸血鬼三等兵でございます大佐!!!」

耳元で吸血鬼の声がはじける。鼓膜破れたかなこりゃあ。

「毎回そんな変な挨拶しなくてもいいよ。あと声でかいよ」

「じゃあクールダウンするでござす。それより弘君。大変なことになつたでござす」

大変なのはその変な語尾だ!!!と僕は言いたい。

「なにがあつたの？ 今忙しいから手短にね」

「じゃあ手短に言うでござす。行くでござす」

ん〜、要約のし過ぎだね。誰がどこにいつ行くのかがまったくわからない。

「手短にしすぎですよ吸血鬼さん。誰が、いつ、どこに行くの？」

「私と弘君が、今から、バナラさんの家に行くんでござす!!!」

・・・・・・何故!!!?それといい加減その語尾やめようよ!

「なんでバナラちゃ・・・」

がしっ!!!

僕が話しきる前に携帯を持っていないほうの腕が後ろから何物かに掴まれる。

……この遠慮を知らない力はもしや!?

「……………ごわす〜」

後ろから強烈な視線とかるうじて聞こえる変な語尾が聞こえてくる……………振り向きたくないよう。

振り向いた後どうされるかは大体予想がついていたがこのままだといけないので僕は意を決して振り向く!そこには……………!

につこりと笑いながら僕の腕を骨が折れそうなくらいの力で掴んでいる吸血鬼さんがいました。

「扉もちゃんと用意しておいたで〜ごわす」

吸血鬼は聞いてもいないのににこにここと笑いながら説明する。確かに後ろには大きな扉があり、開いていた。

「き……………君。今回は僕ちゃんと歩けるから……………」

「いくぜ!……………!」

吸血鬼は僕を物凄い勢いで無視した後、男らしいかけ声を発した後僕のことを予想通りひきずりながら走り出す。変な語尾やめたんだね。よかった……………つて今はそれどころじゃない……………!

(悪魔さんこの子止めてー!!)

引きずられながらも僕は悪魔さんに密かにアイコンタクトを送ってみる。

(無理です!!!!)

即答!?!少しは考えてください!

「弘君! 段差に気をつけてね!」

吸血鬼の一声で僕はもう抗うことをやめて目の前の段差や小石達に集中す・・・イダっ!!!!・・・段差に当たっちゃったよ。

「痛いよお」

ぐるぐると回った後のように目の前がくらくらしてくる・・・
あ、小石だ。

「二度も当たるかっ!」

僕は叫びながら体を捻る。ふう・・・何とか避けたよ。

「弘君ちょっと大き目の石があるから避けてね!」

「へ?」

ガツッ!!!!!

僕が小石のほうに気をとられて振り向いた瞬間、どこにあんなの落ちてるんだというくらい大きな石が僕の顔面にクリーンヒットした。

「ぐっ!!」

「あれ？ 大丈夫弘君！？ 弘君！？・・・君・・・ん」

あまりのショックに目の前が暗くなり、吸血鬼の声が少しずつ遠ざかっていく・・・。。。

「ん・・・」

僕は気がつくと、ふわふわのベッドに寝そべっていた。

「じじ・・・どこだろ？」

僕はとりあえず状況確認のために周りを見渡す。

僕の体の上にはよだれを垂らしてむにやむにやと寝言を言っている吸血鬼、ピカピカに掃除された壁や床、天井には豪華なシャンデリア、こちらを心配そうに見つめる白いワンピース姿の可愛い少女・・・。

ん？・・・今へんなのなかった？

ない？そつかそつか……いやあつたから！誰あの女の子
！！

「弘さん。気がつきましたか？」

あ、この声……。

「もしかしてバナラちゃん!？」

「はい。お久しぶりです弘さん」

バナラちゃんは静かに返事をしながらぺこつと頭を下げる。僕もつられてぺこつと頭を下げる。やっぱりバナラちゃん礼儀正しいなあ。

「気分はどうですか弘さん？　なんかくらくらしたり熱とかありませんか？」

バナラちゃんはそう言いながらぱたぱたと素足でこちらに近づいて来て僕の額にその小さな手をのつける。

「大丈夫だよ。心配してくれてありがとう」

「あ……いえ……当然の事をしたまで、です！」

バナラちゃんの顔が見る見る赤くなってく……まだ風邪治ってないのかな？

「バナナちゃんこそ風邪大丈夫？」

「へ？」

僕は熱をはかるためにバナナちゃんの額に手をあてる……ちよつとだけあつたかい。

「……か、顔ち、ちか、ちかい……!!」

「え？ 何？」

よく聞こえないので僕は少しだけ顔を近づける。

「お、お嬢様に何やってんだお前……!!!!!!」

いきなり怒号とともに黒いシルクハットを被ったスーツ姿の女の子が何も無い空から現れた。

「え！？ だ、誰？」

「ちよつとお嬢様と顔近いよー!!」

「ぐほつ!!」

その子はそう叫んだ後困惑する僕のみぞおちになんの前触れもなく正拳を叩き込む……息できない!!

「ちよつとまってよチヨコ！ この人はお客さんよ！」

「問答無用ですよお嬢様！ こいつはわたくしめが……成敗いたします！」

チヨコと呼ばれた少女は成敗する！と叫んだ後、僕のこめかみに狙いを絞って正拳突きを突き出す……が、それは途中でバナラちゃんの手によって遮られた。パンという拳が掌に当たる音が部屋に響く。

「お客様といっているでしょう？ それ以上暴れると……哀しいのですがお仕置きしなきゃなりませんよ？」

バナラちゃんにはっこりと可愛く微笑む……怖い！そして黒い！この子小さな天使さんだ！

「あう……でもっ！」

「……弘さん」

「はいっ！！」

僕はバナラちゃんに天使さんを感じたので条件反射で勢いよく挨拶をする。

「私は少し用事が出来てしまったのでここで私が戻ってくるまでゆっくりとお休みください」

天使……じゃなかった。バナラちゃんは僕のほうをみてにっこりと朗らかに微笑む。

「はい！」

いろいろなことが同時に起きて眠くもあつたので僕は即答する。

「やめてくださいお嬢様！　どうかあれだけは〜！」

「さあ行くよチョコ」

バナラちゃんは鼻歌を歌いながら嫌がるチョコを無理矢理引きずって扉を出た。

僕は二人が部屋から出て扉が閉まっているのを確認してから、やっぱりわらかい布団へ頭から飛び込んだ。

第十六話 僕と修羅場

僕の名前は黒沢弘。好きなものはラーメンと吸血鬼です。

特に吸血鬼には、ぞっこんラブです。

・・・・・・・・なんてね〜！

来ました来ました来ましたよ〜！！久しぶりの私視点！！

「わたくし吸血鬼はこの時をまっておりました〜！！」

「・・・・・・・・むにゃ」

「！！！！」

危ない危ない。いきなり交代することになりそうだったよ〜。

「くっくっく・・・・・・・・このまま三十秒前からあたためていた計画に移るとするか！」

私はできるだけ音をたてずに懐から昨日弘君に買ってもらった武器を取り出す。

「・・・・・・・・ジョーン」

ジョーン！！？それ誰なの弘君！続きが気になる寝言言わないでよ！

「ジョン・・・行かないでジョン！ あ、やっぱり来ないでジョン！」

その気持ち私にもわかるわ！さあ行くのよジョン！

(言ってることが意味不明ですよエヴァンナ)

はっ！！天使さんの声が・・・まいつか。

「・・・・・・・・来てくれたのかバツカニア！」

「ジョンは！！！！？ジョンは何処に行っちゃったって言うのよー！！！」

「はっ！」

「や、やばいわ！ 思わずいつもの勢いでお腹に思いっきり手刀を叩き込んでしまったわ！」

ど・・・・・・・・どづするどづするどづす・・・・・・・・！！

「今ピッカーンと頭の電球がスイッチオンしたわ！」

弘君は今起きそつだ・・・起きたら視点が変わる・・・ならば！

「もういちど寝せよう！！！！！」

私は寝かしつけるために眠りを誘わせるような絵本を探す。

「あ、うるさいと思ったたらやっぱり君？ というかどいてよ、重

くて起きれないじゃん」

もう起キテターーーーー！！！！！！

「むづ。久しぶりの視点が〜！」

「何わかんないこと言ってるの君。とりあえずどいてよ〜」

弘君は私の事を手でどけようとする。

「強引なのねひうるおむきゆうん！！！」

「……………甘〜いおやつ欲しい？」

「どかせていただきます弘様」

くう、ここでは引くが常時視点の座はいつか私が手に入れるぜー

！！

ああ、起きたばっかなのにさんざんなめに会ったよ。いきなりお腹に手刀くらわされるわ、理由もなく頭を絵本のカドで殴られるわ……頭とお腹がイタイ。

「き、機嫌直して弘君！！ ほら、なめかけだけどチュツパチャツプスあげるから！！！」

中学生男児がチュッパチャップス一本で満足するわけないでしょ！しかも舐めかけかい！

「いらないよこんなの！ しかも何故舐めかけなので機嫌をとれるか思っちゃうの!?」

「ずべこべいうな弘三等兵！ 大佐の命令が聞けんのか!!」

ズボツと吸血鬼は僕の口にチュッパチャップスを押し込む。あ・
・甘いな。メロン味かな？

「甘い・・・」

「美味しいでしょ？ もっとあるよ」

吸血鬼はそういいながら頼んでもいないのに既に舐め済みのような色とりどりのチュッパチャップスを僕の口に押し込む。

「苦ひいゝ、なるえあれあげあつかあの（苦しい、何故こんなにいっぱいもってるの）!!!?」

「買いすぎて残ったから弘君にプレゼンツ!!」

ようは残飯を僕に押し付けてるってことですね吸血鬼さん。

「ぶききらいひははめなんはよ（好き嫌いしちや駄目なんだよ）!」

「わかってるよ・・・わかってるけどプレゼンツフォーユー」

絶対こいつわかってねえ!!!

「秘儀！ チュツパ返し！！」

僕はチュツパチャップスをぼりぼりと噛み砕いた後、叫びながら吸血鬼の両腕を左腕で押さえる。

「うっ！」

「好き嫌いは、駄目だよ君」

僕は吸血鬼の手の中にあるチュツパチャップスを奪い取って口に放り込もうとする！！

「いやだあああ！！！」

吸血鬼はすごい勢いで頭を振りながら叫ぶ。どんだけ食わず嫌いなんだ。

「よかつたじゃないか。これで嫌いなものがなくなるかもしれないんだよ」

僕はそう言いながら吸血鬼の口にチュツパチャップスを三本入れる。

「……甘くて美味しい」

吸血鬼はうれしそうに呟きながらほっぺに手を当てる。

「でしょ？ 何事も経験だよ君」

吸血鬼はそれを聞くとえへへと照れ隠しに笑う。そんな光景が微笑ましくて僕もつられて笑う・・・その時！

バンツ！！と扉が勢いよく開かれる。

「お、お前！！ お嬢様のみならずお嬢様のご友人にも手を出したのかー！！！！」

チヨコさん登場です。しかもとんでもない誤解をしていらっしやいます。

「い、いやちょっと待って！ なんで僕が手を出したみたいなことになっちゃってるの！？」

「可愛いおなごを押し倒してにやにや笑っておきながらよくそのよ
うな台詞が吐けたものだな弘とやら！！」

誤解進行中ですね。それより僕にやにやと笑ってたのか・・・
ちよつとシヨック。

「チヨコさん！ 弘君が・・・私に・・・うわああん！！」

吸血鬼は僕の手を振りほどき嘘泣きしながらチヨコさんの方へ駆け
けて行く。

「え！？ ちょっと待ってよ！！！！」

嘘吹き込まないで下さい吸血鬼さん！ほら、チヨコさんからすっ
ごい怒気があふれ出してるんですけど！！

「私は止めてつていったの………だけど………うつつ」

吸血鬼はすすり泣きながらチヨコさんを潤んだ瞳で見つめる……
すごい演技力だね。後でご褒美のチヨコあげなきゃ

「いくらお嬢様の客とも言えども許せぬ！ 成敗いたす！！」

チヨコさんはこれ以上ないほど憤怒の形相で僕に近づいてくる……
……怖いよお。

「いや、だから誤解だつて！！ ほら君も言つてよ！」

「ぶぶ………弘君とぼけるつもりなの！？ あんなことしたのに
！」

今絶対笑つたよね！？しかも僕がしたことといえばチュツパチャ
ツプス口に三個ほど入れただけだよ。ここまでの罪なのか！？

「成敗！」

そんなことを思っているうちにチヨコさんが凄い跳躍力で家具と
家具の間を跳び越し、ベッドに着地する。

「イ、イヤち、ちょっと待ってください！ これにはワケが！」

必死で訴えかける僕の両手をチヨコさんは左腕で押さえつけ、右
腕を大きく振り上げる。その時！

バンツ！！と扉が勢いよく開かれる。……デジャヴ？

「チョコ！ お仕置きの途中だというのに逃げてはいけま・・・せ・・・ん」

そこには白いワンピース姿のバナラちゃんが困惑顔で僕とチョコさんを見つめていた。

「いえ誤解ですお嬢様！ 私はこの弘とやらを成敗するために」

「じゃあ、なんでお部屋真っ暗でシーツが乱れてるの？」

バナラちゃんこの世の終わりのようなくらい顔をしながら問う。

「あ、いえお嬢様のお友達がこの弘とやらに・・・ですよねエヴァンナ様？」

チョコさんは目で吸血鬼に助けて光線を放ちながら言う。

「私はチョコさんにこのことは内緒にしてほしいって言われて飴で買収されたの」

吸血鬼は気づきませんでした。しかも嘘八百並べて更なる誤解を招いています。

「チョコ、チョコのバカーー！！！！」

「お、お嬢様！ 待って下さいお嬢様ー！！！！」

バナラちゃんは何を思ったのかいきなり叫びだして部屋を出て行ってしまい、チョコさんはベッドから出てバナラちゃんの後をヒステリックに叫びながらすごいスピードで駆けていく。

「ふははは！ 三つ巴の修羅場！誤解フェスティバル作戦成功じゃ！」

吸血鬼は二人が去っていった方向を見ながら意味不明なことを叫ぶ。これはまったく反省してませんね。あとでお仕置きだねこりゃ。

「はあ、なんかこれ以上ここにいると迷惑掛けそうだな・・・手紙でも置いといて帰ろうか」

「そだね。』これ以上いると迷惑掛けすぎていけないのでとんずらさせていただきます』っと！」

「・・・とんずらつてなんか嫌な響きなんだけど」

「さあ、いくぞ弘君！」

吸血鬼は僕のことを無視してどこからだしたのか茶色の木製で出ているようなドアのノブに手をかける。

「はいはい・・・そうだ君。この飴おいしいよ。舐めてみれば？」

僕はにこやかに笑いながらチョコ味の飴を懐から取り出す。

「茶色だけど、チョコ味じゃないよね弘君？」

「コーラ味だよ。美味しいよ」

「ふーん・・・おやつの時間になったら食べてみるね」

吸血鬼はにっこりと笑う。僕も出来るだけ自然に笑う。

おやつの方が楽しんだ

第十七話 天界出発

私とお嬢様は、綺麗に隅々まで掃除されている廊下を歩いていた。

「あの、お嬢様？」

「何ですか？」

「先程は誤解されるような行動をとってしまいすいませんでした」

私は自分より頭1つ分背の低いお嬢様に深々と頭を下げる。

「・・・いいんですよチョコ。それより弘さん達がお腹空いていると思いますので、食堂へご案内しなければなりません」

弘さんと言う時だけお嬢様の顔がほころんだ・・・気がする。

お嬢様は大変あの弘とか言う冴えない少年がお気に入りのようだ。あれの何がいいのか私にはさっぱりわからないが、お嬢様が良いと言っただからどこかがお嬢様にとっては良いのだろう・・・私はさっぱりわからないが。

そんなことを考えている内に私達は弘とやらがいる部屋の前にいた。

コンコンツとお嬢様は遠慮がちに扉をノックする。

「……」

「……」

返事がないただの屍のようだ。

「寝ちゃったのかな？ チヨコはどう思います？」

「とりあえず開けてみてはどうですかお嬢様？」

「それもそうですね」

お嬢様はそう呟いた後ゆっくりと扉を開く。

「弘さん…….…….はどこ？」

部屋の中に弘とやらが見当たらずにお嬢様は少し暗い顔ををする。……ん？あそこにある紙はなんだ？

「お嬢様、ここにお嬢様宛に置手紙がしてあります。多分あの弘とやらが書いたものでしょう」

お嬢様はそれを聞いてはあつと顔を輝かせる……最近お嬢様は弘とやらに会ってから表情が豊かになった気がする…….…….いいのやら悪いのやら。

「ちょっと見せてください」

そう言いながらお嬢様は私の手から手紙を奪い取り読み始める。

「……………これは!！」

お嬢様は何が書いてあったのか酷く動揺する。

「どうしたのですかお嬢様？」

「こうしてはいられないわチョコ！ 私達も今弘さんが泊まってると思われる天使様の家に向かわなきゃ！」

お嬢様は手紙を読んだ後、どこからとりだしたのかシュレッダーにかける。どうやらみられたくない内容が書いてあったらしい。

「え、あの……………魔鉄工場からのおもちや製造依頼が数え切れないほど来ているのですが……………」

「そんなものは明日にでもなんとかかります！ チョコ、通り道を開けて下さい！」

「は、はい！ 今開けます」

お嬢様があまりにも鬼気迫る表情をしているので思わず私はいつも携帯している移動用のドアを懐から取り出す。

「ど……………でも……………」

「それは禁句よチョコ」

「はっ！ そうでした」

そんなやりとりをしながら私とお嬢様はその移動用のドアの中に

入った。

普段は冷静なお嬢様があれほど取り乱すなんて……手紙にはなんて書いてあったんだろう？

――
――
――

「あの、君。もしかして僕達は来るところを間違えてしまったのかな？」

「間違えてないよ弘君。この部屋に無数の血痕や弓矢が所々に見られるのはく待ち合わせの5分前に来るのがマナーよ」とかなんとかいう適当な理由をつけて悪魔さんを天使さんがハンティングしたからだよ」

「多分なのになんでそんなに具体的なの!？」

もしそんなのが日常茶飯事だったら悪魔さん可哀想過ぎるよ。

「あ、弘さんにエヴァ。お帰りなさい」

そんなことを思っていると天使さんがにつこりと爽やかに微笑みながらこちらへ歩いてくる。何故か赤黒い血痕のようなものが大量に白いブラウスに付着している。

「あー、その血痕は……誰のですか？」

「悪魔のよ」

サラツと言つてのけたよこの人！しかもとびきりのスマイル付きです。相変わらずお綺麗ですねえ……。じゃなくって！

「悪魔さんは大丈夫なんですか！？ その血の量からすると絶対致死量ですよね！？」

「大丈夫だよ弘君。こんなのは悪魔さんニチジョーサハンジだから」

可哀想に悪魔さん……。それよりせめて漢字にしてあげてよ吸血鬼さん。カタカナだと読みにくいしちよつと怖いです。

「エヴァの言うとおりですよ弘さん……。それより弘さんは大丈夫なのですか？」

「はい？ 何がですか？」

「ここに来て三日も経ちましたよ。学校はなんの断りもなしにさぼつてよいのですか？」

あ……。そうだったー！！いやいやまで待てマテ魔手！動揺するな僕！そうだよ！そういうえば三連休で、ここには金曜の夜に来たから……。おお！なんとか今日は月曜日だ！火曜日から学校だから何とか間に合う！

「弘君、弘君」

帰り支度を猛烈な勢いで僕がし始めた時に、吸血鬼が僕の服の袖をつかむ。

「何？」

「今更なんだけど、ここでの一日はそっちの世界だと一週間だよ」

吸血鬼はそう言った後テへっと笑う。なんだその浦島太郎劣化版みたいな設定は！

「う……嘘だ……！！」

もういやだ。もしそれが本当で嘘じゃないとしたら小学一年生から更新し続けていた無遅刻無欠席記録がなくなっちゃうよ……。

「弘君、弘君」

全ての事にやる気が失せて鬱病まで五秒前の時に、吸血鬼が僕の服の袖をつかむ。

「何？」

「………さっきの嘘」

「君がそんなにチヨコレートドリンクが飲みたいなんて知らなかったよ。後で浴びるほど飲ませてあげるから楽しみにしていてね」

僕は口角をあげ笑顔を作る。ただし目は笑っていない。

「ご……ごめんなさい弘君！ 私弘君がそんなに怒るって知らなくて！！」

「謝っても嘘泣きしても許しません！ 後でおしりぺんぺんと美味しいチヨコレートドリンクが待ってますよ！」

「す、すいませんお母様！ もう私はいい子になりますので！」

吸血鬼は嘘泣きが効かないとわかったら正座の姿勢を作った後上目遣いで僕の事を見つめて胸キュン攻撃に入った。なんか段々僕の怒りを静めるバリエーション増えてない！？

「誰がお母様じゃあ！ そんな潤んだ瞳で僕を見つめても駄目だよ君！」

しゅんつとうなだれている吸血鬼を尻目に僕は天使さんにあるものをもらうべく声をかけようとする……。

「必要なのはこれでしょう弘さん」

声をかける前に天使さんがまるで熟年夫婦のように僕の欲しいテーパーピングテープを笑顔で懐から取り出す。天使だからテレパシー能力があるのかな？今は目の前の吸血鬼捕獲に忙しいから後で聞いて

みよう。

「ありがとうございます天使さん」

僕は静かに微笑む服のあちこちに返り血を浴びた綺麗な美女にお礼を言う。

「もう帰らなきゃならないし・・・君を連行するとしますか」

僕は笑顔を崩さぬままテーピングテープを構え吸血鬼にじりじりとにじり寄る。

「や・・・やめてよ弘君・・・や・・・やめ・・・やめてー！！！」

「天使さん。お世話になりました。生きてるかどうかわからない悪魔さんにもよろしく言うておいて下さい」

僕は手足をテーピングテープでがんじがらめにされている吸血鬼を天使さんから新しくもらったロープで背中にくくりつける。

「はい。私はいつでも弘さんとエヴァを待っていますよ」

天使さんは優しく女神のように微笑む。・・・なんか今更だけど
やっぱり天使さんすごく綺麗だなあ。

「むー！ 弘君！ 行くんだったら速く行くよ」

天使さんをぽけっとみていると後ろから吸血鬼の騒々しい声が
耳に飛び込んでくる。

「はいはい・・・」

僕は、天使さんに用意してもらった黄色い扉のドアノブに手をか
け中に入る。

「ぬうー！！！！ 放してー！！」

吸血鬼はくくりつけられながらも元気が有り余っているのか凄く
うるさい。

「こら君！ あんまりうるさいとおしりぺんぺんの回数増やしちゃ
うよー！！」

「え・・・それはやだよ。ほ・・・ほほ、ほら速く帰ろうよ弘君
」！

吸血鬼はおしりを叩かれまいと必死に僕を帰るようにつながして
くる。

「それじゃあさようなら2人とも」

扉をほとんど閉めて中に入ろうとした時に後ろから天使さんの澄んだ声が聞こえてくる。

「さようなら天使さん！」

「まっただ来るよー！！」

僕と吸血鬼は別れの挨拶をした後、扉を閉めた。

第十八話 三日前の出来事

「失礼します天使様」

私はコンコンコンコンと四回天使様が居る部屋へ続く扉をノックする。

キユイーン！ ガガガガ！ バキ！ くちやくちや……

「お待たせしました。どうぞ入ってください」

扉の向こうから何かを床に落とすような音が聞こえた後、天使様から入室の許可が出た。

「おじゃまします天使様」

私とお嬢様は遠慮がちに天使様が居る部屋に入る。真っ白でシミ1つない壁には高価な絵画が飾られていて、2つある木製のベッドの上には触り心地のよさそうな毛布がかかっている・・はずだったのだが。

「天使様いきなりすみませんが、なんで所々に血痕のようなものが付着しているのですか？」

私はもう一度部屋を見回すと、所々に薄く赤いシミがついている。全部白で統一されているから赤はすごく目立つ。

「あら拭き忘れてたのかしら・・・いやケチャップがこぼれちゃったんです」

そう言いながら天使様は爽やかににっこりと微笑む。お、お嬢様より怖い！

「そんなことより天使様。ここに、弘さんは来てないでしょうか？」

そんなことを考えている内に、お嬢様は焦っているのだからなぜかさりげなく弘とやらがどこにいるか聞く。

「弘さん？ さっきもう元の世界に帰っちゃったわよ。もしかしてバナラちゃん気になるの？」

天使様はそう言い微笑みながらお嬢様のことを観察している。

「あ、あの・・・いえ別に気があるってことじゃないのですが・・・」

お嬢様の声が段々小さくなっていき最後にはうつむいてしまう。それを見て天使様は何故か満足そうな表情を浮かべる。

その時私は少し嫌な予感がしてお嬢様にあることを尋ねる。

「お嬢様。もしかして弘とやらのいる世界へ行くなんてことはあり

「ませんよね？」

それだけは避けたい。なんといつても魔鉄工場からおもちゃ製作依頼が山のように来ているのだ。お嬢様の工場にいるもの達だけでは終わらせるのは時間がかかるだろう。

「社長令嬢でおもちゃクリエイターという立場を利用して別世界へおもちゃのアイデアを集めるために長期休暇をとると皆様に伝えましょう」

「…………それは職権乱用ではございませんかお嬢様？」

多分一蹴されると思うのだが駄目でもともと。少しだけ反抗してみる。

「いいんですよ。それより私が別世界に遊びに行くということは内緒にしてくださいね？」

予想通りの清々しい笑みを浮かべながらお嬢様は私に釘を刺す。

「はい。それよりお嬢様の工場で働くもの達だけでは受けた依頼をこなしきれませんよ」

「あの、天使様。できれば弘さんのいる世界へ扉を繋いで欲しいのですが、駄目ですか？」

お嬢様は少し弱々しい声で天使様をお願いする。それを聞くと天使様は再度満足そうな表情を浮かべる。

「いいですよ。がんばってねバナナちゃん」

天使様がそう言いながらパチンっと指を鳴らすと、どこからともなく黄色い扉が現れた。相変わらず天使様の魔法は見事なものだ。私はあのレベルになるには相当修行しなければならぬだろう。

「ありがとうございます。天使様。あ……それより私達が私情で長期休暇をとることは皆様には内緒にしてください。お願いします」

「言いません。約束します」

そんなことを考えている内にお嬢様は天使様にお礼の言葉を言い出現したドアノブに手をかける。お嬢様は行くのを取り消すという考えは微塵もないようで、綺麗な漆黒の瞳の中に決意のようなものが見られる。お嬢様は今までこんな大胆なことをしようと思いついたことさえなかった。これも弘とやらのか………いいのやら悪いのやら。

「どうしたんですかチョコ？ 速く行きますよ」

お嬢様はにっこりと悪戯を考えている小悪魔のように微笑みながら私を急かす。

「少し待ってくださいお嬢様。1つ気になることがあるのです」

私はこの部屋にはいつてから一番気になっていた部屋の隅にあるゴミ箱を指差す。

「天使様。あのゴミ箱から出ている赤い液体は何なのですか？」

それを言うと天使様は少し沈黙した後……。

「好奇心は身を滅ぼす……という言葉をチヨコさんは知っていますか？」

爽やかにこれ以上ないほどの笑みを浮かべた。

――
――
――

僕は二階建てで3LDK、つまり三個の部屋と台所とリビングがある家の中にいた。

「やっぱり我が家はいいな〜！」

「そつだよね〜」

二階建てで3LDK、つまり僕の家の中で僕はテーブルを解かれた吸血鬼と一緒にリビングで大の字になって寝そべっていた。

「弘君。そつち行っていい？」

吸血鬼はそう言いながら僕の返答を待たずに立つのが面倒らしく、ほふく前進しながら僕に近づいてくる。

「君。それだと腕疲れちゃうよ」

吸血鬼は僕の忠告を聞かずにほふく前進を続ける。吸血鬼が僕の横についたときは顔を真っ赤にしていて額には玉のような汗がうっすらと浮かんでいた。

「ちかれた〜」

吸血鬼はそう言いながらどさっと寝そべっている僕の背中に乗る。お、重いです。

「ほら僕の言う事聞かないからだよ。というか重いよ」

「ま、デザートを食べる時お腹を少しぐらい空かしたほうが美味しく感じると言うしね!」

「……………もしかして君頭打った?」

吸血鬼は僕の事を無視して僕の両手足を着々とテーピングテープで身動きできないように縛っていく。

……………ええ!!!???

「なんで僕縛られてるの!!!?」

「ふふふ、今頃気づくなんてね。弘君ホラー映画だと映画終盤まで

生き残れるけれど最後の最後で死んじゃう人みたいだね！」

「ああ、よくいるよね〜・・・ってそんな役あんまいねえー！！」

悲しすぎるだろその役の人！ということには僕はアレか！？地雷がいつぱい埋まっているところで終盤まで注意深く歩いてたけれどゴールという文字を見た瞬間取り乱して地雷踏んでドカーンって役かい！？というかなんでこんな具体的にいえるんだらう僕は！？

「くはは、私を吸血鬼ではなく純粹ウルトラピュア乙女だと思っ
隙を見せたのが弘君の運のツキよ！」

はい一回もそんなこと思ったことはありません。どちらかということ
悪戯好き腕白吸血鬼だと思っていました。ってそんなこと冷静に考
えてる場合じゃないよ！このままだと絶対僕午後のデザートになっ
ちやうよ！

「頼むよ君！ からからにするのは止めてね！ ちょっとだけ貧血
にならない程度ならいつでもすっつていいから！！」

「必死だね弘君。なんか必死な弘君見ると可哀想になってきたよ」

吸血鬼はそう言いながら声のトーンを下げる。・・・もしか
してこれは許してくれる雰囲気では？

「そんな弘君を見てると思わず>出血<大サービスしちゃいそうだ
よ」

この子がそんな甘いわけなかったね〜。というか出血だけ強調す
るのは止めてよ吸血鬼さん！すっごく怖いよ！

僕は必死に吸血鬼から逃れようと手足を動かすがかなりきつくてーピングしているらしくびくともしない。

「いやまって君！ これしゃれになんないよ！ 絶対死んじゃうって！ー！」

「うーん、そうだよな。やっぱりいくらなんでも弘君が可哀想だよね・・・」

吸血鬼はどうしようかなと三秒ほど考えた後・・・。

「でもやっぱりいっただっきまゝす！！！」

動けない僕の首筋に噛み付きました。

――

――

――

――三日前――

「お嬢様。もしかして私達は迷ってしまったのでは？」

「それを言わないで下さい。もうちょっとで弘さんの所につく・・・」

・・・はずなんです」

お嬢様は弘とやらに会いに行くのに必死で思わずドアの操縦を間違ってしまったらしく誤作動がおきた。そのせいで私達は弘とやらが天界へ出発する直後、つまり私達がドアに入る三日前の世界に飛ばされてしまったのだ。

「しかしこちらのお金を持ってきてないとは・・・このままだと本当に私達は行き倒れになってしまいますよ」

そう言う私も意識がもうろうとして来た。なんといつてもドアに入るのは夕食の直前で、私達は何もここに来るまで食べていないからだ。体を鍛えている私はまだ大丈夫だとしてもお嬢様はもう限界だろう。

「お嬢様。少しお休みになってはいかがでしょう？ お体に障りますし、今は私達がドアに入る三日前なので弘とやらはもう出発する直前ですよ」

「駄目です。速く弘さんの家にいかなければならないので・・・」

お嬢様は最後まで言う前にふらりと揺れた後ばたつとその場に倒れこんでしまう。

「お、お嬢様？ 大丈夫ですかお嬢様！？」

「チヨコ・・・水を下さい」

お嬢様は苦しそうに言う。私はそんなお嬢様を担ぎ込みおんぶしながら辺りを見回す。と、およそ50Mほど先に小さな公園があっ

た。

「あ、あそこに公園があります。あそこで水を飲んで一休みしましょう」

私は内心焦っているのだがなるべく冷静にお嬢様に言う。

「ええ、そうしましょう・・・ありがとうございます」

お嬢様は弱々しく私の背中で礼を言う。これは急がなければ！

「はい！」

私は疲労もなんのそのですぐさまお嬢様をおんぶしたままかけだし公園の水のみ場に到着する。

「運んでくれてありがとう」

お嬢様は私にそう言いながら水のみ場に顔を近づけて蛇口から噴き出す水を飲む。私もノドが乾いていたのでお嬢様が十分に水分を摂取して近くにあるベンチに座ったのを確認してから飲む。

「生き返りますねお嬢様」

「ええ、たまにはこんなのもいいですね」

お嬢様は少し弱々しいが先程よりは幾分元気そうな声で返事をする。

「ですが、お水だけではやっぱり駄目ですね。お腹が減って死んで

「しまいそうです」

「お嬢様もそうなのですか？ 私もそろそろ限界です」

私達は空腹をまぎらわすために水を大量に飲んだ後、誰もいない砂場に大の字に倒れこむ。

「速く弘さんに会えるといいですね」

「そうですねお嬢様」

私はにっこりと微笑むお嬢様に返事をする。こんなに柔らかく笑うお嬢様を見るのは久しぶりだ。思わず私もお嬢様につられて微笑む。

「君達もしかして吸血鬼の知り合い？」

声が聞こえたので首を動かして後ろを見ると、背の高い男がいつものまにか私達の側に立っていた。

「な、何奴！！」

私はそう叫びながら立ち上がろうとするが空腹と疲労で立ち上がれない。

「まま、そんな身構えないでよ。見たところ疲れてるようだし、僕の家に来ない？ ごちそうしちゃっようよ！」

その男は元気にそう言った後にぱつと笑う。その目はきらきらとおもちゃを与えられた子供のように輝いている。

「で、ではすみませんが少しの間貴方様の家で泊めさせていただきませんか?」

お嬢様は辛うじてそれだけ言う。なんといってもいきなり知らない男に泊まっていくといわれたらはいと言うのに相当勇気が必要だろう。

「ということだ。世話になるぞ」

「やったー!! 俺も手に入れたぞ弘ー!!!!」

私達が泊まるのを了解した瞬間男は叫びだした。叫びだしたと思ったらいきなり寝転がっている私達の手首をがっと思む。

「あ、待って下さい。今弘さんと・・・」

「ちょっと待てお前・・・」

「まあ、まずは!!!!」

男は私達の話を遮った後・・・。

「出発だー!!!!!!!!」

大きな掛け声とともに私達のことをひきずりながら走り出した。

これからどうなることやら。

第十八話 三日前の出来事（後書き）

更新が少し遅れてしまいすいませんでした。

第十九話 お嬢様を探せその1

「さあ！！ ついたよ君たち！ って聞いてるのチヨコさんとやら」

私の服は、優とか言う弘とやらの友人にずりずりと長時間引きづられて、修正不能ぐらいぼろぼろになっていた。

「お、お嬢様……大丈夫ですか？」

私はお嬢様が心配になり隣を見る……………誰もいない。

……………誰もいない！！??

「お、お嬢様はどこにいったのだー！！！」

私はそついいながら優とやらにつめよると、優とやらは「ニコニコ」と能天気には微笑みながら言う。

「あれ、もう一人の子いなかったの？ どうりで少し走ってるとき軽くなってたわけだ」

少しは後ろを気にしろたわけめ！

「気づいたらさっさと言わぬか！」

「いや、軽くなったから好都合ぐらいとは思ってなかったし、まさかあの子がいなくなってるなんてね」

く、くそお！この男一人の可愛らしい少女が行方不明になったというのに能天気すぎる！もうだめだ。私がお嬢様を探しに行かなければならん。

「協力して探そうとしてもらおうと思ったがもういい！！ 私一人でお嬢様を探しに行く！」

「今から探しに行くのなら地図あげるよ。お腹減ってるかもしれないからお菓子も用意するね」

男はそのそと歩きながらかなり巨大な屋敷の中に入って行くの……のろ過ぎる！

「おそいぞ優とやら！！ さっさとせんか！！」

私はそのそと歩いている優とやらに速く動いてもらうためにげきを飛ばす。

「それが物もらう人の態度なのかな」

優とやらが何か言ったが私の耳には届かなかった。

「なんか言ったか！！」

「なんでもないよ！！ すぐ戻ってくるから待ってて！！」

優とやらは駆け足で屋敷の中に入ってゆき私の視界から姿を消した。

――
――
――

「優とやらは……何故こんなに来るのが遅い？」

優とやらがすぐ戻ってくるからといってからもう20分は経つ。なんでお菓子と地図持ってくるのに20分も経っているのだ!?

「んやあゝごめんごめん。お菓子はチョコさんだからチョコ系にしようか、バニラちゃんを探そうという意気込みをこめてバニラアイスにしようか迷ってね」

「そんなので迷うな!!! 一刻をあらそうんだぞこのたわけ!!!」

私は優とやらの頭をぐーで殴ろうとする。優とやらはぼけっとつたっていたにもかかわらず顔だけ動かしてなんなくかわす。

「危ないなあ。チョコさん乱暴者だとお嬢さんもらえないよ」

「ぐっ、へらず口を!!! ……いや、今はお嬢様を探すのが先だ」

優とやらが肩をすくめるのを見て私の中の何かが切れそうだったが、お嬢様が迷子なのでなんとか平静を保つ。

「よっし、じゃあ一緒に探すぞ〜!」

「わかったから速く行くぞ〜!」

・・・へ?

「何故わざわざ私がお前と一緒にお嬢様を探さねばならんだ。私一人で十分だ!」

私がそう言うと、優はにっこりと気味悪いぐらい笑いながら私の側に立つ。

「チヨコさんがあまりにも魅力的だから一緒にいたいんだよ〜!」

・・・こいつクロス!!!

「ほら、怒らない怒らない。怒ってる暇あったら早くバニラちゃん探しに行こっ!」

「誰が怒らせてるのだ!」

そんなことを言いながらも私はつつぷんをはらすためにぐーで優の顔を思いつき殴る。今度はクリーンヒット!

「ぬがはあっ!」

優とやらは意味不明なやられ声を出して2メートルほど吹っ飛ぶ。

「あー、すっきりした!」

ああ、知恵の輪が解けた時と同じくらい晴れ晴れとした気分だ。

「ほら! 速く行くぞ優とやら!」

顔をおさえている優とやらの手首を掴んで無理やり立たせる。

「もう、乱暴だなあ」

優とやらはそう言いながらも笑っている。なんとというか……こいつはへらへら笑わなければ少しはかっこいいのだが、なんか台無しだな。

「どうしたのチヨコさん? そんなにまじまじと俺を見て……もしや惚れちゃった!」

「そうかそうか。お前は鼻が曲がるだけでは足りないらしいな」

私は優しく微笑みながら拳を固める。

「じよ、ジヨードンだよチヨコさん! ほら、速く探しに行こうよ!」

優とやらはよほどさつき痛かったのか必死に殴られまいと私のことをうながす。

「ふん！ わかったなら速くお嬢様を探すぞ。地図を寄せせ」

「え、俺も走るから一緒に探そうよ」

優とやらはにぱつと笑いながら私に同意を求めてくる。

「まあいい、お前がいれば私が迷う心配はない」

こいつのしつこさは並じゃないからな。どうせ根負けするだろうと思って私は同行を許可する。

「チヨコさん最高ー！！」

優とやらは子供のように手を叩いて喜びだす……………なんか見てて微笑ましいな。

「っと、そんなことより速く行くぞ優とやら！！」

「合点了解！！ デートだデートお！！」

「……………後で顔面にクレーターを作つてやる」

私は同行を許可したのを後悔しながら小さな声で呟いた。

――
――
――

「まずは俺達が始めて会った公園に行ってみようよチヨコさん。そこにバナラちゃんいるかもしれないし」

「そうだな。速く案内しろ」

優とやはらは遙か前方を指差す。

「そこまっすぐ行けばみぎてのほうに公園が見えてくるから、まずは全速前進！」

優とやはらはそう叫んだ後走り始める。私も大地を蹴り優とやらの走っていった方向へ疾走する。

「もう少し早く走れんのか優とやら！」

私はあつというまに優とやらを抜き去りながら優とやらに激を飛ばす。

「ふうん、チヨコさん意外と足速いね」

優とやはらはどんどん加速して私に近づいてくる……しかも笑顔で。

「気色悪いぞ優とやら！ 走りながら笑うな！」

「まあ気にしない気にしない」

にここに微笑ながら優とやらは私の横につく。

「それより、公園見えたよ！」

優とやらがびしっとおよそ100Mほど前方にあるブランコを指
差す。

「案内ご苦労。もう帰っていいぞ優とやら」

私はしっしっとして手で追い払う仕草をする。

「ま、待ってよ。まだ公園にバナラちゃんがいると決まったわけじ
やないし」

「それもそうだな……ちっ。同行を許可するぞ優とやら」

「今舌打ちしたよね!？」

私は優とやらを無視して公園に駆け込む。

ブランコと滑り台と砂場……探すがお嬢様のいた痕跡らしき
ものはない。

「おっと、これはもしかして!!」

優とやらが私の背後で何かを見つけたかのように叫んだ。

第二十話 お嬢様をさがせその2 リーゼント頭との戦い(前書き)

テスト期間で更新が遅れてしまい、大変申し訳ありませんでした。
今度から更新は少しはやくしていきたいと思えます。

第二十話 お嬢様をさがせその2 リーゼント頭との戦い

「これは……さっきなくしたと思ってた携帯電話だ!! こんなところにあつたのか〜!」

「そんなので引つ張るなこのたわけが!!」

私は思いつきり優とやらの頭にハイキックを喰らわせる。クリーンヒツッ!!

「だつてえ、なくなつてたものが見つかったら嬉しいじゃないかあ」

優とやらは頭を抑えながら弱々しく言う。

だとしても一話分も引つ張るな!! 読者様のなんでこんなひつぱつたんだよ的なため息が聞こえてくるだろうが!

「あ! そういえば」

そんな私の思いはよそに優とやらは何かを思いついたのかぼんつと掌を拳で叩く。

「またくだらないことだつたら顔面の形を変えるぞ」

「だ、大丈夫! 今回はいい案だよ! だからその握つた拳を解いてよ!」

こいつに期待はしていないが私は何も考えていないのでとりあえず案を聴いてみることにする。

「ふ……じゃあ今から俺が考えた案を発表したいと思います！
はい拍手」

もちろん手は叩かない。叩いたら最後、絶対こいつは調子に乗る。

「冷たいね。拍手しないと話さないよ……もちろん今の嘘だからね！」

優とやらは私がギョツと拳を固めたのを見て慌てて前言撤回する。

「コホン。では言います」

「最初からそうしろ。で、どんな案なのだ？」

「バニラちゃんの携帯電話に電話すればいいんだよ。そうすればどこにいるかわかるでしょ？」

……その手があったか！！！！！

「そ、そそそ、そんなことか！！ そんなこと最初から気づいておったわ！」

本当は全然思いつかなかった。執事チョコ、一生の不覚だ！

「じゃあもう電話したのかい？ 俺は携帯で話してるチヨコさん一回も見てないんだがなあ」

「ちゃ、ちゃちゃんと連絡した！ 私がそんな単純なことも気づかないような奴だと思っていいい、いるのか！！」

こいつには絶対思いついてなかったということを感じられたい！！

「なんでそんなに動揺してるの？ もしかして、今まで気づかなかったのかい？」

「も、もちろん最初から気づいておったぞ！」

「本当は気づいてなくてまだ電話してないんだろっ？」

「う、うるさい！！」

私はかなり恥ずかしくなってこいつを地平線まで吹っ飛ばすぐらいの力をこめて回し蹴りをくりだす。が、ひょいっこのいつはそれをかわす。

「もしかして凶星？ チヨコさん顔真つ赤だよ」

にぱつと優とやらは可愛らしい笑みを浮かべる。こいつは人を言葉で虐めるのがすつごく好きらしい。

「く、嫌な性格してるなお前」

「真つ赤なチヨコさんもかゝわゝいゝいゝ!!」

優とやらはくねくねと奇怪な動きをしながらにこにここと笑っている。

プチッと私の中で何かが切れた音がした。

「調子乗りすぎだぞたわけがっ!!!!!!」

私はありつたけの力をこめて右ストレートをくねくね奇怪な動きをしている男の腹にぶち込む。めきめきと骨が軋む音が響き渡る。

「や、やや、やっだあばああ!!」

そいつは意味不明なヤラレ声を発しながらはるか後方へ吹っ飛んでいった。

「くそ・・・あいつのせいで無駄な体力をつかってしまった」

ぼんやりと視界が薄れていく・・・さっき優とやらから菓子を強奪して食べておけばよかったな。

ドンッ

「っ！」

そんな事を考えているとどうやら誰かにぶつかってしまったらしく、立つのもやっとな私はしりもちをついてしまう。

「いつてえ〜！！！！！」

声が出たほうを見ると、いかにも格好から入りましたというリゼント頭で学生服の前をはだけさせている筋骨隆々なチンピラと、その取り巻きのような恐ろしいほど前歯が出ているチンピラがいた。というかぶつかっただけであんなに痛いわけないだろう。

「ねーちゃんがぶつかっただせいで骨おうれちまったよお。慰謝料くんねえかなあ！！！！！」

「くんねえかなあ！！！」

こんな心身友に疲弊しきっている時にこんなのに出くわすとは・・・無視しよう。

私はくるりと踵を返しその場から立ち去ろうとするが、出っ歯の男が私の事を羽交い絞めにする。

「穢れた手で触るな出っ歯。この両腕をへし折るぞ」

「でっ・・・人が気にしてること言いやがって！！ フラフラのくせによお！」

出っ歯が言うとおり、確かに私は今疲れている。この出っ歯貧弱男はどうにかなるかもしれないが、さすがにあの絶滅危惧リーゼント頭男は倒すことはできない……。これはめんどろくなことになつたぞ。

「ここ人通りが極端にすくねえわけじゃねえからよおお、速くお金くんねえかなああああ!!!?」

「くんねえかなああ!?!」

リーゼント頭が私の目の前に拳を突き出しながら叫び、出っ歯はアホみたいにそれを繰り返している。

「金などない。あつたとしてもくれてやるものか。よくそんなダサいヘアスタイルで外歩けるな」

リーゼント頭の額にピキピキとくつきり青筋が浮き上がる。

「ちょ、調子こきやがってこのアマー!!!!!!」

リーゼント頭が唾を撒き散らしながら私をなぐりつけようと拳を引く。

「まてええ~~~~~い!!!!!!」

リーゼント頭が私を殴りつけようとしたその時、ここには場違いなほど陽気な声が響き渡る。……………こいつはもしかして。

「店がよぶ血がよぶ人が呼ぶ！ 正義の味方、白くあ優！！！！」
来てしまった~~~~！！！！察したとおりいつの間にか優とやらが立っていた。

「あんだあてめえ？ 今このねーちゃんをいたためつけるからちよいとどいてくんねえかなあ？ それとも先にいたためつけられちまうかあ？」

「口臭がきついよ君い。しかもなんだいその頭は？ そのヘアスタイルはとっくに絶滅したんじゃないのかい？」

優とやらはニコニコと笑いながら鼻を押さえる……性格最悪だ。

「おい兄貴になんて口きいてんだよ小僧！！ シメるぞこらあ！」
出っ歯はへらへら薄っぺらい笑いを貼り付けている優とやらが自分より弱いと思ったのか私の事をリーゼント頭にあずけ優とやらの前に躍り出る。

「あらら〜、出っ歯だね君！ こんなところで油売ってるより、歯医者行ったほうがいいよ」

「ふ、ふざけんなああああ！！！」

出っ歯はキレながら優とやらに殴りかかる。

「めんどくさいねえ。チヨコさんも心配だからちやちやっと終わらせちゃいますか」

優とやらは軽々とその拳をさばいて裏拳を出つ齒の顔面に叩き込む。優やらは顔を押しやっている男の後ろに流れるように回り込み手刀を後頭部に叩き込む。

「さ、次は君だよ絶滅危惧頭君」

前のめりに倒れこむ出っ歯男には目もくれず優とやらはこちらに振り返る。

「こ、このガキガアアア!!」

ニコニコ笑っている優とやらが頭にきたのかリゼント頭は私を突き倒し、優とやらに突進して顔面を殴りつけようとす。が、優とやらは軽々とそれをかわす。

「うるさいなあ……チヨコさんも心配だしちやちやっと片付けますか!!」

優はのんきになっこり笑いながらこっちをむく……と、よそ見していたのがたまたまのか思いつきリゼント頭の拳が顔面にヒツトする。

「い、痛いねえ……!!」

優とやらは鼻を押さえる。ここが勝負の際と見たのか、リゼント頭が激しく優に殴りかかる。

優とやらはもうサンドバック状態で、リーゼント頭に殴られ続けている。

「すっ、優!!! 大丈夫か!!!?」

私は少し心配になり助太刀しようと立ち上がったが・・・空腹と疲労で立てない。優はどうなったのだろうと見てみると、なんとにつこりと微笑んでいる!?

「チョコさん・・・俺のこと心配してくれるなんて!!!」

「・・・は?」

あっはははと鼻歌でも歌いそうなほどハイテンションになった優はリーゼント頭の拳を軽々しくかわして思いつきり頭突きをリーゼント頭に食らわす。

「がっ!」

「いやあ、わざとこんなノロイ拳喰らってたかいもあつたつてもんだよ!」

優はひるんでいるリーゼント頭のこめかみに体重を乗せたフックを叩き込む・・・とリーゼント頭は糸が切れた人形のようにカクンと地面に崩れ落ちる。

「いやっほ!! しかも俺のこと優ってよんでくれたね!」

優は笑顔で阿呆のように叫びながら横たわっている私の隣にしゃがみこむ。

「この……馬鹿者が!!!」

「イデっ!! なんて思いつきりグーでなぐるのさあ!」

優はそついいながらも私に手を差し出す。

「……いや、私のことよりお嬢様のことをたのむ」

私はお嬢様の事を思い出して優に電話してもらおうと携帯を取り出そうとする。

「あ、それならダイジョーブだよ。実はチョコさんが不良さんに絡まれている間に友達から電話があつて、家で預かってるから来てね。だつてさ」

「よかった。見つかったか……ありがとう優」

私は心が緩んだせいなのか自然と優の手を掴む。

「なんとチョコさんが御礼を言ってさらに俺の手を掴んだ!! 今日には雪でも降るのか!?!」

はあー、たった一日の付き合いでどうしてこいつはこつ無礼になれるのだ。私は無言で優をたたく。

「痛いよチヨコさん!!」

「ふん、わめいてる暇があったら早く私のために何か食べ物をもつてこい」

「もう、人使い荒いなあ」

優は少し早足でどこかへ駆けていく……。

まあ……「うづいづのも悪くない。

第二十一話 楓家へ行くころ！

「弘君待っててば〜!!」

さあ学校へ行くころと玄関を出ようとした僕の背後からげんきな吸血鬼の声が聞こえてくる。

「何〜？ 僕速く行かないと遅刻しちゃうから、君は今日家で留守番してなさい」

「学校なんてどうでもいいのよ弘君！ 私達には与えられた使命があるでしょうが！」

そんな使命まったく身に覚えないです。というか朝から凄いハイテンションだなあこの子。

「ほら！ そんな『今日はアニメの放送日なのか！？ 知らなかった！』みたいな顔しないで！」

「してないよそんな顔！ さっきも言ったけど僕急いでるから、今日は留守番頼むよ！」

僕がそう叫びながら駆け出そうとすると、吸血鬼が僕の腰にしがみつく。

「私達の視点の座が奪われそうな気がするの〜!!」

吸血鬼は意味のわからないことを叫びつつ僕の腰を万力のような力で締め付けながら、いつも来ているぼろきれのようなローブの中

を「」そ「」そとあさる。

「あつた〜！！ 時間移動装置〜！！！！」

吸血鬼がローブから取り出した物は…… チュツパチャップスだった。

「い……いやそれどう見ても…… チュツパチャップスで……って痛いよ。締め付けすぎだって！！」

「その痛みは私の弘君への思いの分だけ痛いのよ！」

「うん、やめてくれる？」

僕はなんとか懐から板チョコを出し吸血鬼の前にちらつかせる。

「しょうがないなあ……」

「ふう……骨に異常ないか心配だなあ」

僕は骨に異常ないか腰を触ってみる……うん、触るたびに激痛が体を駆け抜ける以外異常ないね。

「よし弘君！！ 今からちよこつと四日前に行くぜえ！！」

「あ、今骨痛くて無理だよそんなこと！ いや骨痛くなくても無理だと思うけど……」

「ま、そういうな少年。いいものあげるからそこに寝てくれないかな？」

僕はなすがままに吸血鬼につながされ、とりあえずその場に寝転がる。

「だっしやあああつああ！！！！！」

「ぐほつつっ！！！！」

寝転がった瞬間気合のこもった吸血鬼の手刀が僕の顔面に直撃！！！！

僕へのプレゼントはあの世への片道切符だったんだね。後で僕もチヨコプレゼントしなきゃ

吸血鬼は相当な力で叩いたのか目の前がぼんやりとかすれていく。。。

「ごめんね弘君。時間旅行装置はわけあって弘君には極秘なの」

そんな声が遠くから聞こえたかと思うと、僕は意識を失った。

吸血鬼は弘がばたんきゅ〜状態になったのを見計らって、ろぶの中から楕円状の黒い球体を取り出す。

「えー！もしかして弘君ばたんきゅ〜状態になったのに私が視点じゃないの！？」

（前回暴走してしまったので今回は一回だけ視点無しですよ）

「はっ！ 今天使さんの声が！……まいつか」

吸血鬼は独り言を言った後球体を両手で握る。

「時間移動装置、発動〜〜〜！！！」

吸血鬼がそういうと球体が一瞬黒い閃光を放ち、巨大化していき、大きな黒い縦穴になった。

「よしっ。準備完了。チヨコさん！視点の座は渡しませんよー！！」

吸血鬼はそう叫んだ後、弘を引きずりながら意気揚々と黒い穴の中へ入っていった。

――
――
――

私は楓さんらしき家の前に行き……って私視点だよー！！

「やったー！私視点だ〜！！」

この喜びは・・・この喜びは・・・チャイムにぶつけるしかない
！！

ピンポンピンポンピンポン・・・出ないなあ。

ピンポンピンポンピンポン・・・出ないねえ。

ピンポンピンポンピンポンピンポンピンポン・・・
さあもう一回！

バンッ！！

「うるさいぞたわけ！！！！」

もう一度チャイムを押そうとした瞬間、扉が勢いよく開かれチヨ
コさんがやってきた。もう、第三回ピンポン祭りを開催しようと思
ったのにい。

「は！ お嬢様のお友達でございましたか。失礼いたしました！
まあ立ち話もなんですので中へ」

チヨコさんに促されて私は楓さんの家に入る。靴はもちろんそろ
えておかなきゃね！

家の中は玄関から入ってすぐみぎてに階段があり、左手にはリビ
ングらしきものがある・・・キッチンもある！！後で新作く直火
焼きプリンスペシャルをを作って弘君に食べさせてあげなきゃ！！

「後ろにひきずっているものの靴も脱がしておいたほうがいいのでは？」

「あ、そうですねえ」

私は無理やり弘君の靴を脱がす。その際にゴツツと弘君の頭を机の角にぶつけちゃったけど・・・気にしない

「それにしてもチヨコさん。二週連続で視点の座を奪うとはなかなかのものですな」

「なりゆきです。いくらでもおゆずりいたしますよ」

「そんなこといいながらいやににににしていますねえ。なにかいいことありましたか？」

「ちよつと・・・ありましたね」

チヨコさんはそんなことをいいながら少しだけ赤くなっている...

...ああ、チヨコさんかわいい!!

「抱きしめたい〜!!」

「うわっ！ いきなり何するんですか!!」

「またまた〜赤くなっちゃって〜チヨコさん可愛い〜!!」

私が赤くなつてうろたえているチヨコさんの事をぎゅ〜と抱き

しめていると、階段から楓さんと……確か弘君のお友達が降りてきた。

「あら、いらっしやい吸血鬼ちゃん」

「おお！ 久しぶりだね吸血鬼。二階でまたババ抜きしようぜ……
・チヨコさんもやりますか？」

楓さんにはっこり微笑みながら気を失っている弘君のお腹の上に足を乗せる。

「……やってやってもよいが、かわりにお嬢様のお友達の相手をしてくれないか？」

「合点了解です」

弘君のお友達は私の腰を掴んで私を担ぎ上げる。イエーイ視点が高いぜー！！

「さ、二階に行くか吸血鬼」

「そだねー！！」

弘君のお友達にはっこり微笑み、私を担ぎながら階段を登り始めた。

「チヨコさんはそこに転がってる万年不変男の足を掴んで引きずって来て下さい」

「合点了解です」

後ろから何かが続で階段に当たる鈍い音が聞こえてくるけど・・・
・気にしない

第二十二話 気がついたら鉄拳制裁（前書き）

更新が長きに渡り停止してしまい、すいませんでした。

今日から更新復活していきますので、皆さんこれからもよろしくお
願いいたします

第二十二話 気がついたら鉄拳制裁

「う、うん」

「おお、気がついた!」

いきなりの光に目がくらみ僕が目をごしごしとこすっている時に、吸血鬼の騒々しい声が聞こえてくる……。ていうか後頭部がズキズキするのは気のせい？

光に目が慣れたと思うと、吸血鬼が僕の事を覗きこんでいた……。ていうか僕の上乗ってるし……。

「……………ここはどこ?」

「ふ、そんなのも理解できないなんて……。だから弘君はいつまでたっても永遠の十三歳なのよ」

いやそれは理由にならんだろ。ていうかなんだその永遠の十七歳みたいなフリーズは!十三歳じゃ若すぎる!

「いやわかないから! だって学校行こうとしたら手刀くらわせられて気がついたらここにいたんだよ!!?」

「事实は小説よりも奇なりなのよ少年」

「誤魔化すな!!」

吸血鬼と話していても埒があかないので僕は周りを見渡してみる。

少しだけ古いのか所々に小さなシミが目立つ壁、可愛らしい熊のぬいぐるみが置いてある机、綺麗に整えられているシングルベッド・
・あ！ここは楓の部屋か！

「むぐ、どうしたのいきなり黙り込んで……もしかやお腹減った！？」

お前と一緒にすな！というかお前はお腹減ったら黙りこむのか！

……そういえば吸血鬼は手刀を僕に食らわす前に何か言っていなかったかな確か三日前に……そうだ、四日前に戻るっていつてたんだっ！

「もしかして君……もう四日前に戻ったとかいうんじゃないでしょうね？」

ありえないとは思いつつも、恐る恐る僕は聞いてみる。

「えーっと……」

バンツ！！！

吸血鬼が何か言おうとした時、扉が勢いよく開く……。

うーん、すっごくやな予感がするのは気のせいだろうか？

「大丈夫ですかお嬢様のご友人ー！！！」

はい、予感的中〜。

扉を勢いよく開けたチヨコさんは瞬間移動したんじゃないかと言
うくらいに素早さで吸血鬼の下敷きになっている僕の横に立ち、慌
てて僕の上に乗っている吸血鬼を抱き上げた後、憤怒の形相で僕を
見る……ってばくなんか悪いことした！？

「居候の少女を部屋に連れ込むとは……やはり貴様にはきつ
い制裁が必要なようだな！！」

「ご、誤解ですよチヨコさん！！」

もう鬼の形相をしちゃっているチヨコさんは僕の声などまるで初
めから聞こえていないかのように、ズンズンとこちらへ近づいてく
る。

す、すごく怖い！！

「き、君！　なんとか誤解といてくれない？」

「無理!!」

「即答は酷くない!?!」

吸血鬼は僕の叫びを無視してケラケラと笑っている。他人事だと思つてケラケラと笑いおつてえ!!今度ご飯抜きだ!

「覚悟はいいか? 弘とやら?」

吸血鬼の今後について考えていたら、いつの間にかチヨコさんが眼前に来ていました・・・チヨコさんの顔が怖すぎて直視できない!!

「いや、あの・・・」

僕はあまりに怖くて周りを挙動不審に見渡す・・・所々に小さなシミが目立つ壁、可愛らしい熊のぬいぐるみが置いてある机、綺麗に整えられているシングルベッド、ケラケラと笑っている吸血鬼、右腕を天まで届くかのように振り上げているチヨコさん。

ば、万事休すか!!!

僕はもうあきらめて衝撃に備え目をつぶる。

バンッ!!!

チョコさんの拳が僕の頬にクリーンヒットする直前に、扉が勢いよく開く・・・デジャヴ？

「チョコさんここにいるー！！？」

はい、ここで優来ましたー！

扉の前に立っている優を確認すると、チョコさんはよほど驚いたのか拳を止める。

「優・・・どうしたのだ？」

「ほら、さっきみんなでトランプするって言ったよね？」

優はそんなことをいいながらにっこりと微笑む・・・くう、爽やかだねえ！！

「む、確かに言ったが、今私はこいつを成敗するのに・・・」

「まあまあ、それは後にしようじゃあないか。さ、弘と吸血鬼も一緒においで」

優がチョコさんを急かすと、渋々といった様子でチョコさんが部屋を出て行く。

「・・・あ、ありがとう優ー！！」

僕は全身を集中させてチョコさんの足音が遠のくのを確認した後、

優に激しく御礼を言う。

「いや、御礼なんていらないぜ。それより吸血鬼のほっぺ触っていい?」

「む、この透き通るような肌に触れるというなら弘君が黙っちゃいないぜー!」

「別にいいよ」

「な、何!? 弘君の鬼! ひとでなし! カレー!」

「イエーイ!」

優はにこつと微笑んだ後、僕に対して悪口を言い続ける吸血鬼のほっぺをむにっとなつかむ。

・・・というか聞き流してたけどカレーって悪口か!?

「おお! やっぱり柔らかい〜」

優は吸血鬼のほっぺをつかみながらうっとりとしている。・・・後で僕も触ろつと。

「喜んでくれて何よりだよ。それより速く行かなくていいの? ちヨコさんの怒りが再発するかもよ」

「それもそうだな! じゃ、リビングにでも行くか!」

優は元気にそう言った後名残惜しそうに吸血鬼のほっぺから手を

放した後、部屋から出て行った。

「弘君、ほっぺ痛いよー!!」

「自業自得だよ。ほら、リビングに行くよ」

僕はベソをかきながらほっぺに手を当てている吸血鬼の手をつかんでリビングに向かおうとしたが、僕はふと思った。

「ねえ君。さっきも聞いたんだけど・・・」

「何？」

「今いるこっつて本当に四日前の世界なの？」

「へへ・・・それはヒミツ」

吸血鬼は顔の前で人差し指を立てながらにっこりと笑う。

「おーい!! 弘に吸血鬼!! みんなでトランプやるぞー!!」

僕は少しすつきりしなかったが、リビングのほうから優の声が聞こえてきたので、それ以上探るのは止めてリビングへ向かった。

第二十三話 鮮血愛好家にご用心

「あ、弘さん！ 気がついたんですね」

「遅いぞ弘とやら！」

「あっ！！ もう起きたのロリコンー！！」

リビングには、相変わらず可愛らしいバナラちゃんと、最強従者チヨコさんと、気分を害すようなことを平気で言っている楓がいた。

「うんおかげさまで、それよりまた会ったねバナラちゃん」

「無視するなロリコンー！！」

「はい、また会いましたね弘さん」

「今日はまたどうしてこっちに來たの？」

「それは実はですねえ、こちらのオモチヤを研究しに來ていて・・・」

そう言いながら僕は騒がしい奴を無視して、バナラちゃんと雑談し続ける。・・・それにしてもバナラちゃんって可愛いし、行儀もいいなあ・・・お嫁さんにするならこんな子が理想的なんだろうなあ・・・と、かなり危険なことを知らず知らずの内に思ってしまった。もしかしたら僕は口・・・いや、考えるのはよそ

それにしても、こうやって見ると・・・どっかの鮮血愛好家とは大違いだ。朝起きる時にお腹の上で飛び跳ねられることもなく、炭と化した卵焼きを口に捻り込まれることもないだろうなあ。

「それって私の事かな弘君？」

そんなことを考えていたら、背後からドスの効いた声と共に物凄い殺気が発せられていることに僕は気づく・・・これはやばい！速く謝らないと絶対殺られる！

「ごめん吸血・・・！！！」

「いただきます」

必死に考えていた100以上の言い訳を言う前に吸血鬼はがぶつと僕の首筋に噛み付く。

よほど怒っているのか、今日の噛み付きはすつつつごく痛い！！！！

「痛ええええ！！！！！」

「ふははは！ おもひひつたかひほくくん！？（思い知ったか弘君）

人の家で近所迷惑よろしくといったぐらいの騒音を発しながら叫ぶ僕の首から、ぼたぼたと鮮血が飛び出し血痕が僕の服に付着する。

「ぬあっ！ これこの前買ったばっかの洋服なのにー！！！」

「心配しなくてもあんたの魅力は何を着ても変わらないわ……
ププププ」

忍び笑いしながら言われたら何の説得力もないぞコラ！！

「今かなり皮肉こめて言っただろ楓！ ていうか、君！速く離して
よ！」

「そうだぞ吸血鬼い。速く離さないとみんなでトランプできないだ
ろっ？」「

「お前の中の優先順位は僕の命よりトランプ遊びなのか優！！」

「少女に首筋を噛まれて死ぬなんてロリコンの貴様としては本望だ
ろっ弘とやら？」

「そうだよロリコンのあんたには最高のシチュエーションじゃない
！ 何事も前向きに考えよう！」

くそっ！悪魔共め！どうしたらそんな非道な言葉がひよひよい
出てくるんだ。などと僕が人の皮を被った化け物共を罵ろうとした
時に、僕の前に忘れていた唯一人の味方が現れた。

「エヴァンナちゃん。もうそれぐらいにしてください。弘さんが可哀想です」

ああバニラちゃん。僕の味方は君だけだ！！その優しさのベクトルが僕に向いているというだけで、もう僕はすごく幸せだよ。

「む、へも〜（む、でも〜）」

「エヴァちゃんは弘さんが好きでそうやってるのはわかりますが、いつの間にかポツクリということになってしまったら取り返しがつきませんし、哀しいです」

バニラちゃんが一言一言話す度に、吸血鬼の噛む力が少しづつ和らいでいき、ついにはゆっくりとだが僕の首から口を離してくれた。ぼたぼたと血が落ちていたわりには意外と出血はしていなかった。ふう、安心。

「そうだね、そうだよね……あんまり強く噛んでごめんね弘君」

「え！？ あ、別にいいけど、今度からはあんまり噛まないでね」
「うん」

吸血鬼が予想外に素直に謝ったので僕は拍子抜けしてしまい、怒るタイミングを逃してしまった。まあ、反省の気持ちがないよりはましだし、ここまで反省している子を怒ると僕の良心が痛むので噛

まない為の釘を打った後、吸血鬼の頭を撫でる。

「よし！！ 吸血イベントも一段落したわけだし、トランプやるかみんな！！」

吸血鬼がにつこり笑ってほのぼのムードが漂ってきた瞬間を狙い、優が大きな声で叫ぶ。

「それより優。一重にトランプをやるといってもババ抜きに神経衰弱死地並べにDIE貧民など色々あるが、どうするのだ？」

「あ！ そうだよな。今考えるよ」

優はそんな事を言いながら少し僕達とは離れたところに移動する。

「ちょっと待て！ 今明らかに存在しないのあったでしょ！ DIEとか死地とかトランプに絶対使用しない用語だと思っけど！？」

「うるさいわよロリコン。今は流れにまかせなさい！」

「そつだぞ弘とやら！ 今は優にまかせるのだ」

「くう……そうだね。今は優と流れに身をまかせるよ」

この二人と口論になったら十中八九僕のガラスのハートが粉々に砕け散ってしまうので、僕は渋々身を退く。

と、そうこうしているうちに優は考えがまとまったのか、ポンッと手を叩いた後目を輝かせて、僕達の前にやってきた。

「難しいルールのトランプゲームは吸血鬼とかがいるから駄目で、かといって普通に神経衰弱やババ抜きをしても楽しくない・・・ならばどうすると思う楓!!?」

楓はそれを聞いても、最初はなんのこっちゃ?と言いたげに首を傾げていたが、段々理解したのか、にやにやと顔をほころばせる。

こ・・・これは嫌な予感がするぞ。

「簡単なゲームで、なおかつ緊迫感を持たせるためには、あれしかないだろう!!」

「そうよね!! あれしかないわね!!」

困惑気味の僕達を尻目に、楓と優はにこにこ子供顔負けの純粋な笑みを浮かべながらはしゃぎだす。

「一体何をやるというのだ優? そんなにはしゃいで?」

「何やるの??!??」

『それは〜！ 罰ゲーム付きトランプ！〜！』

見事に二人の声が重なるのと、バニラちゃんと吸血鬼の目がキラリと光ったのと、チヨコさんが呆れた顔をするのと、僕のテンションが急降下したことが、ほぼ同時に起こった。

はあ、どうなることやら。

第二十四話 罰ゲームは命懸け

清々しく晴れ渡る青空

周りできゃつきゃと微笑ましい笑い声をあげながら遊んでいる子供たち。

僕達の肌を変色させるのに全身全霊をかけているかのような紫外線。

ブランコさえない、砂場しか見るようなものはない見慣れた公園。

そして、全力疾走で凶器を持っている鮮血愛好家と皮肉と悪口で構成されている女から逃げる僕。

「ちよつ。それで刺されたら真面目に死ぬよ僕！」

「くはははっ！！ 逃げられんぞ弘君め〜！」

「葬式のお金は貴方の入っている生命保険の金額から出してあげるから安心してこっちへきなさい」

二人は僕の話など聞く耳持たずに、極上の笑みを浮かべながら鈍い光を放つ凶器を持ちながら走って来る。もうかれこれ30分は同じ場所で全力疾走しているはずなのに、この女衆はまるで疲れた様子はなく、呼吸を乱れていないようだ。

化け物か！

「まてや弘君~~~~~!」

「おい跳ぶのは反則だぞ君!」

「じゃあかしい!」

太陽を背に、吸血鬼が僕に向かって飛び掛ってきた。

—————数時間前—————

「ストレートフラッシュうう!」

「つ、ツーペアだよ」

「フォーカード!」

「く……ストレートだ」

トランプゲーム大会をやったはいいが、ババ抜きが始まった途端。僕と吸血鬼だけがずっとババを引いてばかりで終わらないので、吸血鬼と決着をつけるためポーカー五本勝負対決になった。

が!……非常にまずい!

この子ったらヒキが強すぎる!なんでこんなにヒキが強いんだ? ビギナーズラックか!?

このゲームなら子供の頃からやっていたから、こちらに分がある

と思つてたのに、ここまで負け続けだと、流石にへこむ。

「あらら平凡。またまけっちゃつたの？ あと一回負けちゃつたら罰ゲーム決定よ？」

「わかつてるよ！」

カードを切る役の楓が僕の怒りなど意に介さずけらけら笑いながら僕と吸血鬼にカードを配る……ん？

あれ、吸血鬼に配る時だけ楓の袖下からカードが……ってイカサマじゃねえか！！

「かつ、楓！」

「見えたか？ 気づいたか？ これがイカサマだ！！」

「何どつかで聞いたことがあるような台詞言つて開き直つてんだ！」

「ふ、気づいたときにはもう遅い。貴様は私の罠にはまっていたのだ」

吸血鬼は子供とは思えない新世界の神に匹敵する笑顔を手札を僕に見せる。

ロイヤルストレートフラッシュ

かくして僕は、公園で35分間耐久逃走ゲームをすることになったのであった。

「ほら弘、罰ゲーム終了時間まであと一分だ。ガンバガンバ」

「あとたったの一分なんだぞ弘とやら。男なら耐えんか」

「ちよっ！ この状態であと一分間も耐えられるかあ！」

僕はその時完璧に吸血鬼にマウントをとられていて、吸血鬼が首筋に噛み付こうとしているのを必死に手でしのいでいた。

近くのベンチでは短気な執事と性格最悪が楽しい見世物を見るよ
うな目で僕を見守っている。

っていうか最近僕誰にでも無視されてる？なんとなく泣きたくな
って来た。うん、こっ見えて繊細なの。

「弘さーん！ あと少しなんで頑張っ
て下さーい！」

涙腺崩壊3秒前ぐらいのときに、見るのも眩しい白ワンピースをきた可憐な少女が手をはちきれんばかりに振っているのが見えた。

「ありがとうバナラちゃん！」

それを見て完全に涙腺が崩壊しそうになっただけど、なんとかこらえてお礼を言うだけで済みます。あとはこの吸血狂をなんとかするだけだ。

おわっ！歯が首にかすった！

「観念せい弘君よ！ お命頂戴いたしやすっ！」

「吸われてたまるか」

僕はかなり本気になり吸血鬼の歯を手でかわす。

「あと十秒！」

優とチヨコさんの声がカウントダウンでハモる。二人って何か最近息ひったりだな。

危なっ！ いまよそ見してた。

「今日こそ吸わせて頂きます弘殿！」

「いつも吸ってるだろがい！」

今日こそは吸わせまいと、僕は必死で歯をかわし続ける。

5・・・4・・・3・・・2・・・。

あと二秒！ 次の攻撃をしのげば僕の勝ちだ！

「だああらあくらええい！！！」

もう女の子が発する声じゃないねこれは。

なんて、呑気なことを考えて現実逃避したくなるほど、気合がこもった吸血鬼の噛みつきは速かった。

「だが残念！ 必殺、一口チロルチョコ投げ！」

「・・・あ」

パクッ

「終了~~~~！！！」

またもや綺麗に声がハモった優とチヨコさんの声で、ゲームが終わった。

「ちっ、鮮血が飛び散るのが見たかったのに……残念だわ」

楓がそんなことを言うのを僕は無視して、気絶してる吸血鬼をおんぶする。

あっ、前より軽いな。これあとで言うてあげたら喜ぶかな？

「それよりちよつと疲れた。アイスが食べたいから、楓コンビに行つてきてくれる？ はいお金」

「めんどい。優買つて来て〜」

こんなことになったのもすべてこいつのせいなのに、性格最悪だな。

「うい、じゃあいきましたよチョコさん」

「たわけ！ 何故私が優と行かねばならんのだ！」

「好きなアイス選べま……」

「行くぞ優」

最後まで聞かずチョコさんは優の耳を引っ張りながら一緒にコンビニに行った。やっぱりなんだかんだで仲いいな、あの二人。

プルルル……。

「はいもしもし」

「ってか楓、携帯出るの早いな。まだワンコールさえしてなかったぞ。」

「俺のときは20コール以上待つくせに。」

「……ってあなた。元気してたか？何、召集？わかったわ。明後日行くわ。じゃね」

「誰から電話？」

「教えないよ。ってか用事できたから、私もちよっくら買い物行ってくるわ」

「楓はそう言いながら公園を出て行った。」

「公園に残ったのは僕と吸血鬼と、バナラちゃんだけになった。」

「ねえ」

「あの」

第二十五話 死神にご用心

「もしも・・・」

「はい、こんにちはーっ！いや初めましてかな弘君。吸血鬼から僕のこと聞いてない？ そりゃないよー。あのことはもう親友中の親友なんだよ、なのに弘君に一言もないなんて辛いな。いやそれともすでに僕の事を聞いていながらにして隠しているという隠れたお茶目さが僕に対してだけはたらいているのかな？ それとも・・・」

通話ボタンを押すと、底抜けに明るい声が携帯から機関銃のように飛び出してきた。いきなり知らない人から電話が来る時は新キヤラ登場か僕が酷い目にあうかのどちらかなので、とりあえず慎重に受け答えをする。

「あの、すいませんが貴方誰ですか？ 全然吸血鬼からは話を聞いてないんですが」

「まったく、同じローブつながりで仲よしだったのに、なんでこういう大事なことを君に伝えてくれないかね。吸血鬼そっちにいるかい？ いるんだったら電話変わってほしいんだけど、ああ寝てたらそのままにしててね。寝顔見に行くから・・・ところで今吸血鬼は寝てるかい？」

「どうやらこの電話先のお方は人の話を聞く気はないらしい。流石吸血鬼と自称親友だけある。よし、こんな時は・・・ガチャ切りだ！」

「あ、すみません今吸血鬼はここにいないんです。それじゃあまた」!

ガチャリ・・・ツーツー。

ふう。危機は去った・・・。よし、携帯の電源OFFにしようか。

とつるるるる！ とつるるるる！

「く、ガチャ切りしてこちらに話す意志がないのを無言で訴えたのにそんなの無視してすぐさま再リダイヤルしてくるなんて、なんて奴だ！」

とつるるるる！ とつるるるるる！

く。取るしかないのか。

ポチ（通話ボタン押した音）「酷いじゃないか弘君！ 人の話は最後まで聞くべきではないかね？ ガチャ切りには人の気分を害し、不快にさせるといってもすばらしい効果があるのは認めるが、そういうのは相手にしたくないしつこいセールスマンと宗教を無理やり進めてくる表面は優しく装っているが意外と押し強いおばさんと心の底からにくい奴と今相手にしたくない奴にやりたまえ！」

とりあえずまずは僕の話をして・・・」

ガチャツ・・・ツーツー！

ふう、改行する間もなくマシンガントークを開始してくるとは、流石に僕の予想範囲の外だったね。まあ、流石に二回もガチャ切りされたら懲りるだろう。これで諦めてくれるといいんだけど・・・

とつるるるる！ とつるるるるる！

「なんなんだこいつはー！ ふざけてるのか！」

「弘さん、エヴァンナちゃんが起きちゃいますよ？」

とつるるるるる！

「あ・・・ごめんねバナラちゃん。大丈夫、チョコッと頭に血が上っただけで、冷静だよ」

「そうですか。あんまり怒ると体によくないので、気をつけてくださいね」

バナラちゃんはそういいながらうつると上目遣いで僕を見つめる。ああ、もう僕はその視線だけでお腹がいっぱいです。僕はそんな事を考えながらバナラちゃんの頭を撫でる。

とつるるるるる！

「ありがとうバナラちゃん。やっぱり君は優しいね」

「い、いえ！ そんなことないですよ」

バナナちゃんはひまわりのような笑顔を振りまきながらえへへと笑う。

「可愛いね。お嫁さんにしたいくらいだ」

「えっ!?!」

「とても好みだよ。なんといつても足のラインがすばらしい！ まだ未成熟で発展途上だけれど、そこがとてもそそるといふものさ！」

「……………貴方誰ですか？」

いつの間にかそこには、吸血鬼とは対照的な綺麗なローブを着こなし、顔をカボチャのお面で隠している男が立っていた。もちろん先ほどの台詞は僕が言ったものではない。

……………少しだけ思ってたけど。

「ふ、名乗るのが遅れたね可愛らしいお嬢さんに弘君。だが名乗る前にひとつ聞いておきたいことがあるのだが、そこにいるお嬢さんは迷子かい？ もしそれなら僕が親のところへ送ってあげるから、はやくこの懐に飛び込んでおずええ!!」

もちろん最後の奇妙な声はこの男が意図的に発したものではない。いきなり目を覚ました吸血鬼とバナナちゃんが男の腹をグーで殴ったからだ。聖母並に心の広いバナナちゃんでも怒っていたらしく、

目がとつっても怖い。

「何バニラさんにセクハラしてんの死神くん！ いい加減その癖直さないといつか捕まるよ」

「それはそれはすまなかつたね。あまりにそこのお嬢さんが魅力的でそそつたからね、つい……。あ、もちろん君の触ればもちもちしているほっぺもそそるよ！」

「そついう話じゃねええ！」

決まっただけ！！吸血鬼の跳びまわし蹴りがカボチャ面の腹に突き刺さったー！！

ん……。というか今吸血鬼なんて言った？

「君。もしかしてあそこで転がっている奴が……。死神？」

「うん、死神」

これからもつとさわがしくなりそうだな。僕は吹っ飛ばされて地

面に転がっているカボチャ面をみてそう思った。

第二十六話 死神&吸血鬼物語その1っ！

「それにしても君。どこであんな怪しい奴と知り合っただの？」

僕は遠くで転がってピクリとも動かない、どうやら気絶したらしい力ボチャ面を指差す。

「えー、どうしよっかなー。弘君が私に毎日三食作ってくれてたまに一緒にお散歩でかけてくれて夜に絵本を読んでくれたら教えてもいいよ！」

「それいつもやってあげてることですよ」

「むう！ そうだったね！」

「教えてくれたら、今日の夕食はオムライスにしてあげるよ」

「教えましょう！」

吸血鬼は嬉々とした顔で即答したあと、コッホンとわざとらしく咳をする。

「それでは、死神とセクシーグラマーパーフェクト吸血鬼の、波乱万丈物語の始まり始まりっ！」

むか〜しむかし、あるところにセクシーでグラマーでパーフェク

トな吸血鬼がいました。

もうそのスタイルのよさといったら、そこいらのアイドルとは次元が七次元ほど違い、体からは七色のオーラを噴き出していて、足のラインは神のラインともよぼれて・・・

ガッツ！

話すなら真面目に話なさい。

ぐーで殴ることないじゃない弘君！

・・・真面目にやります。だからそのチョコはしまってください。

コホン。そんな七色のオーラを体から迸らせている吸血鬼は、なんとなくりよこ・・・もとい天使さんの命令を受け、地獄界というところに来ていました。

七色のオーラを迸らせている吸血鬼は、それを覚えているのかわいなのか、地獄界名物の地獄七大温泉の一つ、マグマ温泉にゆつたりとつかっていました。

え、マグマ温泉とか大丈夫なの君？

突っ込みは禁止よ弘君。全部に答えるとじかんがかっちゃうから。

いい湯だな、アハハン　いゝい湯だな

吸血鬼は地獄にいるのに極楽浄土に昇りそんな笑みを顔に浮かべ、

定番の歌を歌っていると、ふとどこからか同じ歌が聞こえてきます。吸血鬼は誰が歌ってるんだろうと思いついて、その声のするほうへ向かっていきました。

するとそこには、吸血鬼に追いつきそうだけどギリギリ追いつけない程度に、可愛い吸血鬼と同年と思える女の子が湯に浸かっていました。

どこかで見たとような顔でしたが、吸血鬼はちょっとだけ記憶力がなかったのも、その子がどこで見た顔かは思い出せませんでした。が、私と同じ歌を温泉で歌う子に悪い奴はいない。ということ、吸血鬼はその子に声をかけました。

おっす、おら吸血鬼。この温泉でその歌を歌うなんてやるなーおめえ。

吸血鬼かー。じゃあ君は天界から来たの？

おう、こちとら現役バリバリ赤丸急上昇中の吸血鬼でえい。

へー、僕は職業上では閻魔なんだー。

何い！ 閻魔といったら、地獄界ではアイドル的存在じゃないですかい！ いいなー。

あ、でもまだ見習いだからそんなにたいしたものじゃないよー。

でもいいなー！ ねえ、今日君の家泊まってもいい！？

え！ 何でいきなり話がそんなアクロバティックな方向に進んでいくの！？

ぶく、ぶくぶくぶく(うん、今はちょっとした任務でこっちに來てるからね)

吸血鬼は両手を合わせて、ぶくぶくと顔を湯に浸かりながらお願いしますが、その子は困り顔でいいいます。

なんて言ってるの？

ぶく・・・ぷはあー！ ちょっと任務でこっちに來てるから、お父さんとお母さんはこっちに來てないんだよ。

吸血鬼は湯から顔を上げながら言いました。

だから今日寝る宿もないから、閻魔見習いなYOUの家に泊めてほしいんつす。

そう・・・じゃあ、しかたないね。今日は泊まってもいいよ。風呂場で私と同じ歌を歌う子に悪い子はいないしね。

A - Y H E A - ! ! 初対面だというのになんて優しいんだい！
流石閻魔見習い！

ふふ、ありがとう。でも用心してね。

へ、何に？

まあ、私の家にくればわかるよ。

吸血鬼は、しばらく温泉につかり先ほどの歌のよさについてその子と語り合ったあと、その子の家へ行くため、マグマ温泉を去りました。

ねえ、YOUの家はどこにあるん？

うんとね、この道をまっすぐ行って、断頭台広場の先にある異次元横丁の13番地にあるんだ……ってここには任務で来ただけだから、わからないよね？

いや、わいは知ってるぜえ。こう見えてもかなりの地獄通でな、断頭台広場では日夜果物や野菜などの食材がギロチンによってばっさばっさと両断され、異次元横丁では番地ごとに世界が違うと言われておる……ってこれであってる？

いやちよつとまってよ君。断頭台広場とか異次元横丁ってなん……ぐわっ！

はい、話の合間につっこみをいれんとする悪の権化は私、セクシーグラマーパーフェクト吸血鬼が黙らせたので、ここからはつつこみなしで進行していきます。

………突っ込みたいなあ。

ん？ 何か言った弘君？

い、いえ！（聞こえてる！ 絶対あいつ聞こえてる！）

コホン……その子は、吸血鬼の話を書き言いました。

すごい。地獄界の人でも異次元横丁についてはよく知らない人も多いのに……本当に天界から来たの？

まあよく天界での仕事が多い時にさば……もとい小休憩によく来てたからねえ。

へえ……あ！なんかそうこうしてるうちに断頭台広場に着いたよ。

その子が言うので吸血鬼はあたりを見渡すと、そこにはいたるところにギロチンが置いてありましたが、人が一人もいませんでした。

あれ、断頭台広場は前来た時、活気あふれる人たちで溢れていて常に絶え間なくギロチンが果物や野菜を両断していたのに……。

実はね、今月は定休日なんだ。4月になると全部の日が祝日で、温泉しかやってないんだよ。

ああ、だから体に刺青を入れた人たちがそこらへんをねり歩いているんだね！

そうなんだよ。まあいつも練り歩いているけどね。

吸血鬼とその子はそんな他愛のない会話をしながら、断頭台広場を抜け、異次元横丁へ向かいます。

じゃあ、ちょっと13番地に開く扉を探してくるから、君はここでまっつてねー。

うむ、わかったぜよ

その子は、吸血鬼にそう言い放つと、異次元横丁の暗がりへ走っていきました。

と、その時！

お嬢さん。こんなところで一人だけでは危ないとは思わないかね？

異次元横丁の方の暗がりから、男の声がしてきました。

幼い一人の少女に話しかけてくる知らない男の人は、心優しい警察官かロリータコンプレックスな変態かの二択なので、吸血鬼はもちろん警戒します。

ああ、そんなに警戒しないでよぼろぼろロープのお嬢さん。今そっちに行くからさ。

そんなことを男が言ったかと思うと、カツカツと暗がりから足音が近づいてきます。

カツカツカツ………カツ！

改めてこんばんわ。ぼろぼろローブのお嬢さん。

暗がりから出てきた男は清潔なローブを着こなし、とても高そつな革靴も履いていて

顔にはカボチャのお面がついていました。

第二十七話 死神&吸血鬼物語その2つ！ 天使と死神44番

だから、そんな警戒しないでよぼろぼろロープのお嬢さん！

カボチャのお面を被った男ははあはあと荒い息を仮面ごしにはきながら吸血鬼にじりじりと近づいてきます。これで警戒するなというのは無理な話です。

この上限なき美貌に誘われてやってきた変態めが！ わいが成敗しちゃうわ！

あ！ お兄ちゃん！

世にはびこる変態を全世界の少女に変わってお仕置きしようとした時に、さきほどまでいた閻魔見習いの声が聞こえてきました。

危ないよ閻ちゃん！ こいつは全世界の少女の敵……お兄ちゃん！？

うん、お兄ちゃんだよ。というか閻ちゃんってなんかいいね 僕も君の事吸ちゃんって呼ぼ〜っと

おお！ ぼろぼろロープのお嬢さんは我が妹のお友達さんだったのか！ それなら手厚く歓迎しないといけないね！ ささ、速く僕の家へ来ようじゃないか！

カボチャ面はそう言い放つと異次元横丁の暗がりに消えていきました。

あのー、閻ちゃん？ もしかしてあの変態は閻ちゃんと一緒にいつ屋根の下で暮らしていたりするんかい？

うん！ 一緒にお風呂入ったり、寝るときに絵本読んでくれたりするんだよ！

・・・・・・・・・・・・・・・・さいですか

ほら吸ちゃん！ 速く行こう

閻魔見習いはテンションが海より深く下がった吸血鬼の手を引き、変態の巣食う根城へと連行しました。

ほら吸ちゃん。ここだよ。

閻魔見習いが指差した先には、13と金文字が刻まれている漆喰の扉がありました。

おお！ これが別世界に通じる扉か。これから通れるなんて、感激だねえ！

と、吸血鬼はいつも通りのテンションなら言うところでしたが、さすがに先ほどのカボチャ面が待っているところへ自分から出向くのかと思うと、自然と無言になってしまいます。

そっぴいえば吸ちゃん。任務ってどんななの？

閻魔見習いは吸血鬼のテンションなど何処吹く風で、にっこりと笑みを浮かべながら聞いてきます。意外と天然さんです。

んとー、ね。確か『死神44番に手紙を渡す』だったよ。

へー、それってどんな人なんですか？

んー、確か4444人の罪人を裁いて死神界の英雄になったひとらしいんだけど、死神界で人気NO.1の自分より1000歳下のアイドルに手を出して、死神界を追放されちゃった人らしいよ。

あはは！　なんかすごい人なのかまぬけな人なのかわからないね！。

そだよねー！もうそれ聞いたときは大爆笑だったよー。

吸血鬼はにこにここと上機嫌です。閻魔見習いは天然でもあり、人のテンションをあげる人でもありました。閻魔見習いは上機嫌な吸血鬼をチラリと見て、ドアノブに手をかけます。

んじゃ、行くよ吸ちゃん！

おーっ！

二人が元気よく掛け声を発したあと、ドアを開けると・・・そこにはカボチャ面が立っていました。

あり？　お兄ちゃんはさきに帰ってるんじゃなかったの？

そのとおり！　なんでここにいるのだ変態め！　閻ちゃんとお風呂に入ったか一緒に寝たりした罪は百刑に値するぞ！　いまこそ成敗してくりゃああ・・・

まま、そういきりたたないでよぼろぼろローブのお嬢さん。僕が先に帰らずにここで待ち伏せたのは、先ほどの君の任務に関係があるんだよ。

私の任務？

そゆことだよ。

ぼかんとしている吸血鬼の懐から手紙を抜き取った後、カボチャ面は話し始めます。

死神44番にむけてかかれたこの手紙は、いわば僕にむけてかかれた手紙と解釈してもいいんだよ。なぜなら僕と死神44番は切っても切れない関係だからね。

むむ！　だけど変態、YOUが死神44番ではないんでしょう？
なんで読んでもいいことになるの？

それは秘密う

困惑顔の吸血鬼を見てクスクスとカボチャ面は笑いながら、手紙の封を破りました。

ドン！！！！

すると凄まじい轟音とともに、真っ白な扉がどこからかカボチャ面の後ろに現れました。

……あ、これはちょっとやばいな。

う……もしかして。

カボチャ面と吸血鬼は、チラリと後ろにある白い扉を見ながら苦笑いをします。

お兄ちゃんに吸ちゃん？ なにがそんなやばいの？

何も知らない閻魔見習いは困惑気味に二人に尋ねます。

『天使さんが来た！！！！』

ちゃん

二人が息ぴったりにそう叫んだ時、ギイッと木の軋む音がして白い扉が開いていきます。

そしてそこから、にっこりと顔に仏様顔負けの優しい笑顔をうかべ、エンジンのかかっているチェーンソーを構えている、白いブラウスと黒いホットパンツを着こなしている金髪美女が出てきました。

エヴァちゃん？ 確か私が行ってきけたのは死神界だよ

ねえ？　なんで温泉がいつぱいの地獄界に来てるのかなあ？

金髪美女が笑顔を保ったまま吸血鬼に話しかけます。

あ、あの～天使さん。それはその～・・・私の勘がここに
行けと命じたんです！

わかったわ・・・あとでエヴァちゃんにチョコパフェをプ
レゼントしてあげるわ

吸血鬼はそうとう苦しい言い訳をして罰を回避しようとした
が、天使にはまったく通じませんでした。

ところで死神44番。どこへ行く気なの？

ドッキンコ！・・・いや、ちょっと散歩してこようかな～
っと。あは、あははは。

笑ってごまかしても駄目よ死神44番。なんで私がここに来たの
かは、その手紙に触ったから、わかるわよね？

天使が冷たくそういうのを聞くと、死神はあきらめたかのように
ふー、っとため息をついた後、カボチャの面を取ります。

わかったわかった。要するにアレでしょ？　天使ちゃんがわざわざ
ざ来たってことは、僕のことを無理矢理天界に連れて行きたい用事
があるってことでしょ？

そうゆうことよ。一緒に天界に来てくれる？

にっこりと微笑む天使さんを天使を尻目に、死神は懐からとても巨大な鎌を取り出す。

ただでは無理。でも天使ちゃんが僕と全力で遊んでくれるなら、考えちゃうなあ。

カボチャの面をとった死神は、顔に薄く笑みを浮かべながら、クスクスと笑います。

ふーっ、しょうがない子ね。

天使はそれを聞いてやれやれといった様子でため息を付いた後、にっこりと笑いました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1311d/>

僕と吸血鬼

2010年10月20日03時15分発行